昭和46年6月13日発行通巻14号(毎日曜日発行)；昭和46年2月5日国鉄首都特別扱承認雑誌第516号

6/13
220円
14

朝日=ラルース

週刊 世界動物百科



朝日新聞社

読者のみなさまへ

こんな動物が登場します　動物を機械的に五十音順に並べたものではありません。系統だった分類に従って，われわれの親しみやすいサル類から始め，次の順序と冊数でお届けしています。概説(２)，哺乳類(62)，鳥類(64)，爬虫・両生類(16)，魚類(16)，軟体動物・昆虫類・甲殻類・腔腸動物などの無脊椎動物(32)。《１～64号の内容は表３参照》

総目次と総索引がつきます　見て，読んで，楽しむ〝百科〟としてだけではなく，引いて調べる〝事典〟としての機能を完全にするため，16冊ごとにその総目次をつけ，また最終192号には詳細な総索引をつけます。この両者によって，動物界の構成がひと目で理解でき，調べたい動物がすぐ引きだせます。

『私たちの仲間』のページ　カラーページをより理解しやすいものにするため，日本の第一線動物学者の執筆による解説や注があります。また〝動物週刊誌〟として，動物界のニュースや話題，楽しい読物，実用記事などを掲載しています。

ファイルで保存してください　全192冊を，発行順に16冊ずつ，美しいファイル（販売中・定価600円）に，とじこんでください。堅牢で豪華な，全12巻の〝動物百科事典〟がそろいます。途中から購読されたかたは，ぜひ第１号からおそろえください。バックナンバーのお求めは，このページ右欄『本誌の購読について』をごらんください。

目　次

世界動物百科　第 14 号

カラーページ

監修　徳田御稔（理学博士）
翻訳　高橋淑夫（玉川大学助教授）

私たちの仲間

凡　例

□本文中〔　〕を使ったものは，日本版のために付加した説明である。
□くわしい注釈が必要なものには，その語のあとに〔注１〕と番号を入れ，『私たちの仲間』第27ページに，同番号で記載した。
□動物の種名は，原則として和名（一般に通用している外来語を含む），学名（イタリック）の順で表記した。
和名の多いものについては，併記したものもあるが，専門家と相談のうえ編集部で決定した。
和名のないものは，英名または仏名をカナ書きで入れ，原語（ローマン）を付記した。
□人名，地名は，本人または，現地読みを原則としたが，慣用の固定しているものはそれに従った。

本誌の購読について
本誌は，全国の書店，朝日新聞販売店で取り扱っております。
毎週定期的に，配達をご希望されるかたは，お近くの，取扱店にお申込み下さい。
なお，本社直接購入のご希望は，下記あてお申込みを願います。送料は，１部につき30円です。
朝日新聞東京本社出版業務部
　東京都千代田区有楽町2－3　〒100 TEL 03－212－0131
朝日新聞大阪本社出版業務部
　大阪市北区中之島３－３　〒530 TEL 06－231－0131
朝日新聞西部本社販売部出版業務課
　北九州市小倉区砂津　〒802 TEL 093－53－1131
朝日新聞名古屋本社販売部出版業務係
　名古屋市中区栄１－３－３　〒460 TEL052－231－8131

次号予告
6月9日発売



世界動物百科
15号　6／20

カラーページ

私たちの仲間

私たちの仲間

14号………6月13日

なぜ自然を保護しなければならないか

特集
自然保護の問題点
4

山下勝利

自然保護における第4の問題点は，美しい自然を愛し，そこにすむ野生の鳥獣を守ろうという美名のもとに，個人の善意にすがりすぎていることである。

どの地方紙を見ても，月に一度や二度は必ず「傷ついた野鳥を救う」とか「野鳥保護に愛の手」といった記事が掲載されている。

こうした地元民の善意と熱意が，とくに鳥獣を中心とした自然保護をささえていることは事実である。しかし，これらの局地的保護だけで，日本の自然が守られるかというとそうではない。他県へ飛んでいった渡り鳥たちは，そこでまた善意の人びとに救われることを待たねばならない。

かれら野鳥にとっては，公害や開発，密猟者から身を守る以上に，偶然の善意を見つけだすことが，生存の必須条件なのだ。

また，こうした野生鳥獣に示される愛護精神とは別に，ペット動物に対する熱愛ぶりにはすさまじいものがある。

イヌ，ネコ専門の美容師から，ドッグ・ファッションと銘打って，ビキニだマキシだと着せかえ人形のような衣装を売るもの。1か月4万円もするペット・マンションの登場が，なかば冷笑のうちに話題を集めたかと思うと，それも満員。大手製薬会社はペット専用薬として，胃腸薬，整腸剤，総合ビタミン剤，成長薬，はては抜け毛予防のシャンプーまで売りだしているが，これがまたたいへんな売行き。たとえば，登録犬1万1366頭の岡山県では，イヌの薬の売上げが昨年の1200万円からことしは約3倍もの増加が見込まれているという。これは，1頭当たり年間約3万円で，国民の平均年間保健医療費2万0268円（昭和43年度）を優に上回っている。（岡山県は2万0340円）

これらも，飼い主たちの愛護精神の発露には違いない。しかし，野生の鳥獣に対する善意とは，やはり異なる点が多い。それは，動物そのものに対する考え方の相違でもあるのだが，その前に，日本各地で見られる善意と，その限界についてふれてみたい。



新潟県瓢湖のハクチョウ　数少ない保護策成功の例だが，ここにも観光と開発の波が押しよせている

現地の活動と焦燥

現在，新潟県佐渡島のトキは，人工飼育の1羽を加えても，確認されるものはわずか10羽にすぎないが，この鳥ほど劇的な盛衰の歴史を繰り返したものも珍しい。

明治から大正にかけては相当数が生息し，トキ汁などということばが平気で口にのぼっていたが，昭和になって急激に減少，一時は絶滅したとみられていた。

しかし，地元民の熱心な調査により，生存が確認され，昭和9年に文部省から天然記念物の指定を受け，各所に「朱鷺保護せらるべし」の標柱が立てられた。昭和16年には，27羽の観察記録がある。

そこに第2次大戦の勃発である。山林は伐採され，トキの生息地はせばめられていった。戦後になって，農薬の使用がトキからえさを奪った。さらにほろびゆくものに対する好奇の目が，カメラのレンズとなってトキを追いつめたことも否めない。トキは元来人をきらうというより恐れるために，こうした目のなかで巣立ちは確認されず，ついに昭和34年には，4羽という最悪の事態を迎えたわけだ。

この年から文部省の補助金が出るようになったのだが，直接トキ絶滅の危機に対処したのは，生息地である新穂村の人たちであった。

日本最後の生息地という宿命を負わされた村では，さっそく，新穂トキ愛護会を設立した。

4月から6月いっぱいの，トキにとっていちばんたいせつな営巣育雛期間には，毎日山の入り口付近に監視人を置いたり，冬には雪のなかを山の水田にまで，えさのドジョウを与えにいくという努力が続いた。

最初はたかが鳥のために，と反発する人や，補助金をめぐってあらぬ憶測がとんだこともあるが，昭和35年以後の10年間に，18羽のひなの巣立ちが確認されるという実績とともに，新穂村は文字どおり村をあげての保護グループとなった。新穂トキ愛護会の会員も，20人から現在950人にまで増加し，新穂村の人口の3分の2がメンバーに名を連ねている。

この人たちの保護への熱意，いい換えれば，押しつけられた宿命の十字架への抵抗と，毎月500円ずつ，3年にわたってこづかいを送ってくれた中学生のエピソードに代表される善意の寄金が，トキの命を長らえさせてきたわけだ。

しかし，ことしになって，人工飼育中の2羽のうち貴重な1羽が死んだ。このままでは絶滅への道を歩むしかない。わずか11年で，善意の限界が訪れてしまったのだろうか。

トキのような鳥の人工飼育はむずかしいといわれてきたが，野生の世界では100羽を割ると，自然繁殖は望めないという。まして，現在の9羽ではその可能性は皆無である。そこで今，この段階で

→ *

＊ ——→

9羽の野生のトキを，すべて人工飼育に賭けるということは考えられないだろうか。

野生のままで絶滅させてしまえば，農薬だ，環境汚染だと責任を他に転嫁できるだろうが，再びトキを佐渡の空に舞わせることはできない。思いきった対策をとることが，地元の熱意に報いる道ではないだろうか。

なお，トキに関していえば，保護センター周辺の土地購入に関しても，民間団体のもう1つの善意の限界というものがあった。

昭和42年に保護センターを設立したものの，周囲の山林は民間のものであった。これではトキの生息地として，じゅうぶんな保護はできない。伐採されてからではおそすぎるから，われわれの手でこの土地を保護しようと，昭和44年にある民間団体が土地購入の申し込みをした。まったくの善意から出発した申し込みであったが，ホテルでも建てられ，トキを観光資源にされてはたまらないと，あわてた県は，非難とともに急ぎ土地を買いあげたことがある。トキの保護に本腰を入れるなら，保護センター設立当初に，土地購入までを考えるべきであったにもかかわらず，まさか，天然記念物のトキを商売に使うような輩はいるまい，と変な善意に依存していたために生じた混乱である。

保護と観光と開発の三角関係

同じ新潟県の瓢湖のハクチョウの場合は，トキとはまた違った要素をもっている。「白鳥おじさん」吉川繁男さんのことは，これまで何回となくテレビ，雑誌で取りあげられてきた。新潟市長より，はるかに知名度は高いはずである。

瓢湖に飛来するハクチョウに餌づけをして20年余。現在はシーズンになると，約500羽のハクチョウが吉川さんの呼び声に集まってくる。その点では，これは大成功の例である。

しかし，問題はまた新たに発生してきた。

あまりにも有名になってしまったため，観光地となる恐れが出てきたのだ。休日には吉川さんの餌づけを見ようと，数百人の見物人が集まる。しかし，これはまだいい。

困るのは，吉川さんの熱意を，表面的にだけ理解する人たちの存在だ。人間がその気にさえなれば，ハクチョウの保護や増殖は簡単にできる，そう考えることである。

この考えが，周辺の開発を積極的にさせるのだ。湖さえ残しておけば，ハクチョウはいつでもやってくる，まず人間サマの生活が第一だ，と。

これでは，吉川さんがハクチョウにそそいだ努力は，まったく逆の結果を生むことになってしまう。

保護活動が失敗すれば，野生の鳥獣がそう簡単にふえるものか，人工飼育など無意味だ，という評価を受け，成功すれば観光と開発という，次の難関が再び待ち受けるのだ。

このことを悟ったときに，地元の善意は一気に崩れ去るのだ。その崩れ方もさまざまだが，いちばんこわいのは，それならばと居直ってしまう型だろう。

北海道に，三白旅行というキャッチフレーズの観光がある。雪と流氷のなかで，ハクチョウを見ようというわけだ。なかなかうまい惹句だが，利用できるものはなんでも，という精神がうかがわれてならない。

瓢湖では今年の3月に「瓢湖の白鳥を守る会」が発足した。これは，今後起こりうる環境破壊を未然に防ごうというもので，県に働きかけて周囲の水田を買いあげ，保護区にしようとしている。

善意の美談から出発してグループをつくり，それが定着したところで県や国を動かして保護対策を徹底させるという方法は，もっとも効率のいいものである。しかし，瓢湖の場合，守る会を提案したのが，ドイツ婦人であるというのが残念だ。

白山のニホンザルにしても，アメリカのテレビ取材班の撮影を契機として，本格的保護センター案ができたように，どうも外国人からの指摘をきっかけとすることが多い。

自然保護を完遂させるのに，提案者の国籍を問題にするのはおかしいかもしれない。しかし，地元からの声には耳を傾けようともしなかった新潟県が，ドイツ婦人の瓢湖守るべしの直訴状に，すぐさま周辺部購入の調査費80万円を，新年度予算に盛りこんだのはどういうわけか。面子にこだわる特性を暴露した，といわれてもしかたあるまい。いや，むしろ自然保護というものは，県や国にとっては，自分の体面をとりつくろうときに利用するくらいの価値しかもたない，といったほうがいいかもしれない。

沈黙の春はごめんだ

ことしのはじめ，環境庁に対する要望書というものが，自然保護憲章制定促進協議会から出された。

これは，日本自然保護協会をはじめとして，日本動物愛護協会，日本野鳥の会など48団体が参加して行なったもので，環境庁の機構権限である，「環境の保全（自然保護を含む）に関する基本的な政策の企画立案およびその推進」は，自然保護こそを優先させるべきだという内容のものである。

公害問題の解決のため新設された環境庁だけに，環境といっても人間環境にのみ重点が置かれ，人間を取りまく自然環境の整備こそ急務だとする自然保護論者に，いちまつの危惧をいだかせたために，こうした要望書が提出されたのだ。これは自然保護ということばのもつあいまいさからきているところが多い。

ごくおおざっぱに分けて，自然保護ということばには3つの性格がある。

第1は，自然界のあらゆる生命あるものは，すべてわれわれ人間の仲間であり，その生命を尊重するのは当然である，という生物愛護の精神である。

第2は，客観的に自然をながめた場合，これを利用し，よりよい人間の環境づくりに役だてるのは，自然そのものの存在理由でもあるという，人間中心にみた環境保全の立場。

第3は，生物愛護と環境保全の中間に位置するもので，主として学問的な見地から貴重な自然や生物を保護し，そこから新しい研究，ひいては新しい環境を学ぼうという自然保存の立場である。

この3つを，鳥獣保護のなかにおのおのあてはめてみると，第1の生物愛護の立場からは，かわいそうだ，同じ生きものだからたいせつにしようという感傷論。これがこうじると，ペット愛好家たちにみられる過保護に連なる。

第2の環境保全からみると，まったく

りっぱなペットのお墓はできたが……





2頭の子グマには明確な差があった。

1頭は大振りで，頭の鉢が左右に張り出し，すでにヒグマらしい堂々とした風格を具えていた。首から上の体毛が薄茶色であることも親に似ていた。一見，性質が外向的で陽気であるらしく，応急的に子グマを収めたダンボールの箱の中に手を入れようとしようものなら，歯をむきだして襲いかかってきた。

前肢の爪はゆるやかにカーブして先が鋭くとがっている。この爪で引っかかれようものなら，皮膚が破れ血がにじんだ。——グワァ，グワァ。

大声で吠える度に，薄桃色の口から健康な歯がのぞいた。前に並んだ歯，上下の犬歯，どれも綺麗に生え揃っている。

ものを咬む力も相当なものである。餌づかせるために割箸に蜂蜜をつけて与えると，苦もなく奥歯で折ってしまった。

攻撃の方法もさまざまである。後肢でジャンプし，前肢を広げてとびかかる，いきなり咬みつく，前肢を後ろから前へ振るフック……など，多彩であると共に破壊力もあった。

生意気にも後肢で立ち上がり，よちよち歩いて威嚇することもあった。そういう時，この大きい方の胸には，半月形の白い毛がくっきりと見えた。それは，ツキノワグマのトレードマークのように紙を切ってはりつけた感じの判然としたものではなかったが，それでもかなりよく似たものだった。

もう1頭の小さい方は，おとなしく，控えめで，前肢を折って人をにらみつけていた。体毛はやや縮れて夜のように黒く，鼻面に僅かに茶が混じっていた。半月形のマークはなかったが，立ち上がると右の前肢のつけ根に親指大の白い斑点があった。それは，闇夜に光る1点の星，軍服をいろどる襟章のようでもあ

ヒグマと２人のイノシシ 13

おまえの名はどんべえ

畑　正憲

った。

　間見谷さんの５人の子供たちは，
「先生，そちらにしなさいよ」
　と，小さい方を指さし，
「威勢のいい方を調教してみたいな」
「そうね，ハナコの小さい頃そっくりだものね」
　と，白い月の輪がある方を残しておきたがった。
「そうだね」
　と，僕は内心ニンマリして言った。
「僕は初めてだから，おとなしい方をいただこうかな。……よし，決めた。そう決めていいかな」
「どうぞ」
「本当にそうするよ」
「どうぞ」
「ありがとう。じゃ，こっちが僕の新しい娘だ」
　ちょっとどさくさまぎれの感がなきにしもあらずだったが，僕はひそかに心に決めていた方を手に入れることに成功した。待ちに待って，ついにどんべえを手に入れたのだ。
「どんべえ，どん，どん」
　僕がそう呼ぶと，間見谷一家が口を揃えて抗議した。
「いやだあ，先生。ヘンな名前。メスですよこの子は」
「どんべえだなんてかわいそうだよ。名無しのゴンベエみたいだ」
　どんべえという名前の評判はさんざんであったが，今更変えるわけにもいかないので，
「どんべえというのは，アラビアの王様が最初の子供に贈る最も高貴な，とって置きの名前なのだぞ」
　と宣言して，僕は一種の後ろめたさを隠した。どう衣を着せようとも，娘には似つかわしくない名前だ。

　どんべえ……。
　略して，どんべ，どん，ど……。
　これから，いよいよそう呼べるのである。僕はどんべえが，思い通りの資質を持っていてくれと祈りたい気持だった。
　イギリスのさる有名な作家が，人が２人以上集まると数秒を出でずしてリーダーが決まると書いていたが，人をけだものと言い直してもよい。動物の１腹の子の間には，いつとはなしに順位がついているものだ。
　どんべえの場合，妹だと言ってもよかろう。発育も遅れているし，内気で臆病だとも受け取れる動作をしていた。
　しかし僕は，それがうわべだけのものだと知っていた。動物の気質は生まれてかなり早い時期に決まるものらしいが，体力に優るものが表面にしゃしゃり出てのさばる傾向がある。だが概して，そういう子供ボスの性格は，陰影に乏しく，面白味が欠けることが多い。むしろ子供の頃劣位であったものの方が，細やかな心情を持っている場合が多いのだ。だから僕は，イヌやネコをもらう時でも，なるだけみすぼらしいものを選ぶ。
　その経験がどんべえを選ばせたのだが，決してみすぼらしくは見えなかった。ただちょっと発育が遅れ，おとなしかっただけだ。黒い毛にはきららかな光沢があったし，目の光も尋常ではなかった。
　夜に入って，吠え疲れた２頭は，互いの背に頭を乗っけて眠ってしまった。
　さあ，チャンスだ。
　僕はそうっとどんべえの背に触れてみた。粗い，弾力に満ちた手触りである。まるでゾウの剛毛のような毛がカールして表面を覆っている。その根元には薄ねずみ色をしたうぶ毛の密生。
　手を取ってみた。それでも満足せずに



ダンボール箱の中の子グマたち　どんべえ（左）は，ちょっと内気で臆病そうだったが……

手の腹を頬に押し当ててみる。
　やわらかで，熱い。人の赤ん坊の手よりやわらかな感じで，ほかほかと湯気でも立っていそうだ。
　長い怖ろしげな爪はコーヒー色。ごく先の方まで血が通っていて，灯にすかすと，コーヒーブラウンのカプセルの内側が緋に染まる。
　足の裏は人のものそっくり。ただ指のつけ根に当たる所に，短い毛が生えているだけだった。しかもどんべえには，土踏まずまであるではないか。片方の子グマのものはべったりした扁平足だった。
　それにしても深い眠りである。育ちがよいせいか，一旦眼を閉じたら，どんなにいじっても眼を醒まさなかった。
「先生，めんこいだろう」
　間見谷さんが誇らしげだ。
「ええ」
「ハナコの子だもの，先生の実験，きっとうまくいくよ」
「でしょうね」
「明日から少しずつ人に慣らすけど，決して焦ってはいけないよ。持つ時には首筋をしっかりつかんで，脇の下に片手を入れ，腹を自分とは反対に向けて抱くようにしなさい。そうしないと，首筋を咬まれたら命にかかわるから」
　檻から出した際，僕はひょいと子グマを手渡された。それを前向きに抱いてしまったが，相手がおびえていたからよかったものの，相当に危険なことだったのだ。
「めんこい，めんこい」
　間見谷一家はそう連発し，
「さあ，これで当分テレビともおわかれだ。また始まったよ……」
　と笑い合った。
　テレビをしまいこむのではなく，テレビを見ているより子グマを見ている方が楽しいのだそうだ。ごひいきの勝新太郎の座頭市の映画をやっていても，テレビを見ているのは子グマで，人はその子グマを見て拍手しているという。
　子グマの眼は黒眼がちだが，周辺に白い部分がある。上を向いたり，横を向いたりした時に，その白い部分がチラとのぞく。それだけで，何とも言えぬ生き生きとした表情が生まれた。
「さあ」
　と，間見谷親分の奥さんが言った。
「首輪と鎖を買ってきましょう。首輪をつけないとけじめがつかないから」
　僕はまた，早速町へとびだしていった。初めてわが子を持った時のように，心が浮きたち，買物が楽しい。
　金物屋で，僕は２つお揃いの赤い首輪を買った。男っぽい名前をつけた次女へのせめてものつぐないである。■

反対で，鳥獣はわれわれの生活にとっては，食物として上位を占めるものであると同時に，人間の住みよい環境づくりに役だてるべきで，そのためには保護も必要だという現実的な見方である。
　第３の自然保存では，珍しい鳥獣は，それだけで貴重な財産であり，われわれはこれを次代に伝える義務があるという立場で，天然記念物指定などはこの見地をとっている。
　では，こうした多様な意味をもつ自然保護ということばを，なぜわれわれは信奉しなければならないのか。
　極端にいうならば，われわれ人間は自然を破壊してきたからこそ，ここまで生きてきたのである。それをいまさら罪を償うつもりで，自然保護をお題目代わりに唱えるのか。それとも，自然保護の進展が，文化のバロメーターだとでもいうのだろうか。
　ここで考えねばならないことは，生物愛護だ人間優先だという以前に，今日のわれわれの存在が，自然界における野生鳥獣の存在とまったく同じだということである。
　矛盾に満ちた行政，足りない予算，理にかなわぬ法律，おたがいの善意へのすがりあい。こうした世界で，発展のために身をすりへらし，奇病が出てはじめて公害を知る。われわれこそが，野生鳥獣なのではないか。われわれの化身である鳥獣の保護，自然の保護を訴える真意は，まさしくここにある。
　かつて，アメリカの生態学者，レーチェル・カーソン女史は，その著書「サイレント・スプリング」で次のように記している。
「自然は沈黙した。うす気味悪い。鳥たちはどこへ行ってしまったか。みんな不思議に思った。裏庭のエサ箱は，カラッポだった。ああ鳥がいたと思っても，死にかけていた。ブルブル体を震わせ，飛ぶこともできなかった。春が来たが，沈黙の春だった」（青樹簗一訳）
　こうした環境汚染から，死の世界に進みつつある現実に，われわれは沈黙を守っていてはいけないのだ。■

（本誌編集部）

もうひとつの世界

11

グループ・5プラス1

大きい相手はやはりこわい

動物園のゾウの飼育係は，ゾウの前で倒れるとあぶないという。倒れた場合には，ゾウが襲ってきて，踏みつぶされることがあるというのだ。見かけの柔和さと違って，ゾウはときに危険このうえない動物である。それは，ゾウがわずかな力で行なうことでも，人間にとっては手ひどい打撃になるということもあるし，また，ゾウは相当に高い知能をもっているので，反抗的なのだという一面もあるようだ。

だが，ゾウが倒れた人間を襲うということには，たんにゾウの性質というだけでなく，1つの動物学的な問題がふくまれている。

動物のおどしの姿勢

ネコが追いつめられたり，あるいは戦おうとする前などに，フーッとうなるような声をあげ，背を丸める行動がある。四肢（しし）を突っ張ってつめをむきだし，尾をぴんとさせながら毛をさかだて，目をらんらんと輝かせつつ耳を引き，ときにはきばをちらつかせるといったことが，たいていそれに加わっている。これは，いわゆるおどしであり，攻撃の前触れであって，ディスプレー（誇示）の1つであるといわれている。

その機能が，われわれが使うことばと同じ内容をもっているかどうかは，まだ検討の必要があるのだが，少なくとも状況から判断して，おどしとみられるこの行動は，ネコがからだを大きく見せようとしており，攻撃をしかけようとしているようにみえる。

大きな個体のほうが優勢なのは，同じ種のあいだでならば，まず動物界の一般的傾向である。ネコが毛をさかだて，背を丸めた姿勢は，少なくとも正面から見るかぎり，平常のネコよりずっと大きく見えるのは確かである。かりに，それがネコ自体にとっては，反射的に生じてくる自然な行動であったとしても（そうである可能性が大きいが），結果としては，そのような意味をもっているのである。

このおどしとみられるポーズは，ネコだけの独特のものではなく，哺乳（ほにゅう）類では一般的なものである。

トガリネズミのように，ふだんの行動が目だたない種類でも，頭をもたげて鋭い声で鳴き，ときには後肢（あとあし）で立ったりする。また，カンガルーなどは，ふだんでも後肢で立っていることが多く，かなり高く大きく見えるのだが，ディスプレーとなると，長い後肢をぐんと伸ばして，太い尾でささえてからだをそりかえらせ，前肢は縮めるようにさえする。

陸上最大の動物であるアフリカゾウは，その巨大さをいっそう誇示するかのように，耳をひろげて頭を高くもたげる。カバは，まるであくびのように口を大きく開き，水面から伸びあがるようにしてみせる。

カリブー（アメリカトナカイ）は，口を開きながら首を伸ばし，それによって角を最大限に誇示するし，クマが後肢で立ちあがって，からだを大きく見せることも，これに当たる。



背を丸め，毛をさかだてて敵を凝視するネコ　撮影　田中光常

他種の動物に対しても

このおどしの行動が，からだを大きく見せて，同種の相手に対して威力のあることは前に述べたが，それはまた，別の種の敵に対しても効果があるらしい。

たとえば，ホッキョクグマの襲撃に対して，セイウチは頭を高く上げてディスプレーする。これはセイウチが，戦いの武器であるきばをふりかぶって突き刺すために，自然に出てくる動作であるともいえるが，このような行動が，相手におどしの効果を示すことも確かなようだ。

小型のけもの，たとえばジリスのようなものでさえも，立ちあがって歯をむきだした場合には，コヨーテやキツネもしばしば手出しを控えるようである。

類人猿のなかではゴリラが，おどしのためにやはり立ちあがる。ドラミングと呼ばれるように，両手でバンバンと胸をたたいてそりかえるのである。

× × × × ×

ここで，当初の話にもどるが，ゾウは人間が立っている姿を正面から見ていると，後ろは見えないのだから，ウマくらいの四足獣なみに思えるのだろう。ゾウはもともとあまり目がよくないので，人間の大きさをそう誤認する可能性がある。

ところが，人間が倒れると，急に小さく見えて，今までの大きく強いものとしての偶像が落ちたとでもいえようか。そこで，急にこの〝こましゃくれた動物〟へ襲いかかることになるのであろう。

ここで話をさらにひろげてみると，人間が直立生活を営むようになった条件の1つに，「大きく見せる」ことが考えられるかもしれない。■　（O）

漫画の動物たち　2

恐竜から生まれた怪獣だが……

手塚治虫



飽かれもせずに，子どもたちのあいだで怪獣がはやる。怪獣はいまや，子どもにはペットのように愛されているようだ。ことに幼児が，おどろおどろしい怪物のおもちゃをしきりにねだって買ってもらうなど，おかしな世の中になったものだと思う。

しかし，怪獣の原型といわれているリアルな恐竜には，子どもたちはさほど関心を示さない。「恐竜百万年」などに出てくる恐竜たちは，かなり精密なもので，ティラノザウルス，トリケラトプス，ステゴザウルスなどが三羽烏だが，子どもの反応は，たとえ原始人が登場して，恐竜と戦ったとしても，手をたたいて喜ぶほどには興味をみせない。どうも，子どもはオーソドックスな恐竜を，ふるくさいものとして受け取っているようである。現代に生きるかれらは，どうしても今日性というか，現代社会に息吹く怪物を求めているのだろう。

あるテレビ局が，子どもたちに怪獣を創作させたところ，「公害怪獣ヘドラ」というのが圧倒的に多かったということも，それを物語っているようだ。

ゴジラがうけたのも，その口から出すレーザー光線まがいの怪力線であり，ビル街をミシミシと踏み倒していく今日性のためだろう。かつて「キングコング」という映画が大ヒットしたのも，たぶんクライマックスにコングがエンパイアビルのてっぺんによじ登って，飛行機と戦うという現代の白昼夢を描いたからにほかならない。

なくなった円谷英二さんが，ぼくに，「怪獣は，ありゃわたしがマンガからつくったものなのですよ。マンガの荒唐無稽さと，一種のエグザジレーション（誇張）が，怪獣のうけた要因ですよ」と語ったのは，恐竜と怪獣とがまったく似て非なるものである説明になろう。

それはさておき，記録映画で見たり，動物園で見るかぎり，爬虫（はちゅう）類の仲間は，いつも茫洋としてものぐさである。たまに襲ったり，逃げたりするときに，ぶかっこうに走ることはあるけれど，たとえば哺乳（ほにゅう）類のように，たえずいったりきたり，駆けたり跳んだり……という活発な動作を続けることはない。ときには標本のように，何時間も静止したままのこともある。

ワニやトカゲですらそうなのだから，あの何トンもある巨大恐竜たちが，日がな1日えさや異性を求めて，さまよい歩いていたとは考えられない。おそらくかれらは，ほとんど四六時中うずくまるか立ちつくして，時を過ごしていたのではあるまいか。

ティラノザウルスやアロザウルスなどのたぐいも，たんに風貌のすさまじさがあるだけで，肉食だとはいっても，屍肉をあさっていたのかもしれないのだ。それは，われわれがもっている凄絶な恐竜のイメージとは，まるでかけ離れたぶざまな姿である。

もしも，タイムマシンで中生代にいけた旅行者が，群がって物憂くうずくまる古代爬虫類を見たとき，案外物質文明に疲れはてた現代人のカリカチュアを，思い浮かべるのではないだろうか。■



ミズハタネズミ

Arvicola amphibius

キヌゲネズミ科ミズハタネズミ属のミズハタネズミは，現存している齧歯（げっし）類のなかで，もっとも有害なものの1つである。有史以前の多くの遺跡の中からも，ミズハタネズミによる荒廃の跡が見つかっている。そのうえ，この動物は，ペストに似た野兎（やと）病や，梅毒，回帰熱などの病原体であるスピロヘータの恐ろしい保有者でもある。

ミズハタネズミはその名が示すように，水のなか，とくによどんだ水域にすんでいる。

ミズハタネズミの全長は20～25センチで，そのうち尾長は6.5～8センチである。からだの背面は黒いか，いくらか，かっ色または灰色がかっている。体側は背面と同じ色で，腹面では明るい色調に変わる。つまり，腹部は白みを帯びるか，薄ねずみ色，あるいは黒，濃い灰色のもある。しかし，毛の色には個体



ミズハタネズミ。ネズミ亜目キヌゲネズミ科。
全長20～25センチ，うち尾長が6.5～8センチある。
沼地に生息し，魚類，カエル，甲殻類，軟体動物
昆虫，水草などを食べる。(上)

PH. J. MARKHAM

ミズハタネズミの母と子。
ミズハタネズミの母親は非常に母性本能が強い。
危険なときは，子を口にくわえて運び
身を犠牲にしても外敵からわが子を守る。(下)

PH. MARLET-ATLAS PHOTO

差があるから一様ではない。頭部は大きく丸い。耳はきわめて小さくて，毛の下に隠れている。尾は短く，うろこ状をしているが，かたい短毛でかなり密におおわれている。門歯は黄かっ色である。

　ミズハタネズミは，南イタリア，地中海諸島，イベリア半島をのぞくヨーロッパのかなりの部分に生息するから，その分布はきわめて広いといえる。さらに，西アジアおよびソビエトのレナ川にいたる北アジアにも見いだされる。これに近い種であるテレエストリスミズハタネズミ *Arvicola terrestris* は，ヨーロッパからシベリアにかけて分布し，イランにも生息している。

　ミズハタネズミの生態は，モグラや，次に述べるマスクラットなどの水辺にすむ齧歯類に似ている。この動物は，坑道を掘ってすみかにしているが，坑道は地表から2，3センチで，だいたい植物の根よりも浅いところにあり，そこの地面が盛りあがっているのでわかる。この坑道をこわしたり，一時的に通行できないようにするのは，わけはない。しかし，かれらは飽きることを知らず，必要とあれば1日に何回でも修繕する。1つの巣には，ふつうひとつがいがすんでいる。また血縁関係にあるものは，隣合わせにすんでいる。

　ミズハタネズミは，格別敏しょうというわけではない。しかし，穴を掘ることがたいへんうまく，泳ぐのもまたとびぬけてうまい。静かなところに居を定め，昼も夜も活動する。といっても，用心を忘れているわけではなく，ごくささいな危険のきざしにもすぐに身を隠す。

　植物が好きで，農作物に害を与えている。野菜畑のなかにすみついた場合には，とくにその害がひどい。沼のなかにいる場合にはそれほどでもないが，巣をつくるときに土手をこわすので，農民にとって脅威である。

すさまじいふえ方

　水面から2，3センチのところにはえる水草を前足でつかんで食べる。肉食性も強く，魚の卵，幼魚，両生類を食べて，これらを根絶させてしまうほどだ。昆虫(こんちゅう)類，ヘビ，魚，トカゲ類，ハツカネズミなども捕え，草のなかに巣をつくっている鳥の卵も食べてしまう。秋には巣を大きくして，ソラマメ，タマネギ，ジャガイモ，エンドウなどをたくわえる。それらは，秋から春にかけての食糧になるのである。寒さがきびしくなると眠るが，ほんとうの冬眠にはいるわけではない。

　ミズハタネズミのふえ方は，まったくすさまじい。雌は年に3，4回，その柔らかい巣の中で，2～7匹の，いろいろな毛色の子を生む。雌たちはせっせと子どもの世話をし，勇敢に子どもたちを守る。子どもたちがあぶないとみると口にくわえ，やむをえないときには，急流をも横切って別のところへ運んでいく。自分の安全は，すっかり忘れてしまっているようで，子どもを見捨てるくらいなら，むしろ自分がつかまるほうを選ぶほどだ。

　このネズミにとって，いちばん危険な天敵は，坑道や水の中まで追いかけてくる，イタチとオコジョである。そのほかミミズク，フクロウ，ケナガイタチ，ネコなどがミズハタネズミの敵となる。人間もまた，わなをかけてミズハタネズミをとる危険な敵である。そのわなの仕掛けはごく簡単で，内側のすべすべしたかめやつぼなどを土のなかに埋めておくと，落ちこんだネズミは，もう二度と外へは出られないというわけである。

　ミズハタネズミは，とらわれている状態がきらいである。しかもこの動物は，どちらかというと弱い体質なので，つききりで世話をしなくてはならないし，いわゆるほんとうの意味でのペットには，とてもなれない。



ミズハタネズミ。ネズミ亜目キヌゲネズミ科。
沼や川などの水辺に巣穴を掘り
1家族ないし数家族の共同体をつくってすむが
マイホームづくりに熱心のあまり，土手を破壊し
人間に迷惑を及ぼすこともある。

PH. J. MARKHAM



ミズハタネズミ。
自分で掘った坑道と，水のなかが
天から与えられたミズハタネズミの隠れ家である。
ミミズク，フクロウ，ケナガイタチ，イタチなど
多くの天敵がミズハタネズミをおびやかす。
PH. J. BURTON–PHOTO RESEARCHERS



マスクラット。ネズミ亜目キヌゲネズミ科。
体長35センチ，尾長25センチほどである。
水辺にすみ，小枝を土で固めた隠れ家をつくる。
1，2本の地下坑道が，その隠れ家から
水中へ通じている。

PH. OTT–PHOTO RESEARCHERS



マスクラット *Ondatra zibethica*

キヌゲネズミ科マスクラット属のマスクラットは，その毛皮がアメリカからくるので，アメリカネズミという名で呼ばれている。ジャコウネズミとも呼ばれるが，大型のミズハタネズミと考えてよい。尾がかなり長く，幅の広いあと足，丸い鼻先をもっている。前足には4本の指があり，あと足は前足より長く，指は5本ある。それらの指には，非常にかたいつめがついている。長い毛がわき腹をおおい，尾はつけ根の部分だけが丸く，そのほかの部分は扁平で，わずかに毛がはえ，また，細かいうろこでおおわれている。

2つの大きな臭腺（しゅうせん）が会陰（えいん）部――外部生殖器と肛門（こうもん）との間――にあり，その臭腺の外孔から，強いじゃこうのにおいをもつ白い油性の液体を分泌（ぶんぴ）する。このにおいが《ジャコウネズミ》という名の由来である。

胴体はずんぐりしており，鼻面は厚みがあって，先はとがっていない。上くちびるは縦に裂けていて，その両側に長い口ひげがある。耳は前に倒すことができるが，ほとんど毛のなかに隠れている。目は小さい。からだの毛は密生していて，絹のような手ざわりと光沢がある。毛並み全体が，しなやかな短く細いむく毛である。さらに，やや長い柔らかい毛が，このむく毛にかぶさっているが，その毛はむく毛の倍も長く，つやがある。からだの背面は黄かっ色で，腹面は灰色のなかにかっ色の毛が点在している。尾は黒い。成長した雄の全長は，58～65センチあり，そのうち約25センチが尾である。

マスクラットは，北アメリカの北緯30度から69度の間の地域に生息している。ヨーロッパに移入されたものは，一般に，中央および北東地方に好んですむようになった。マスクラットは水に恵まれたカナダで，とりわけ繁殖している。

大きな湖や，流れのゆるい大きな川の，草の茂った岸，アシなどの水生植物におおわれた沼の岸べに，集団あるいは家族単位で定着する。その生態は，あとに述べるビーバーに似ていて，巣穴には水中に1つの出口があり，また複雑な長い坑道がある。ことに極北地方に近づくにしたがって多くみられるこの巣は，一般にどろを積みあげた上に建てられ，丸屋根型をして水の上すれすれにある。

骨組みはアシ，スゲ，イグサだが，どろでつぎ合わせてある。この中には，直径40～60センチはあると思われる1つの部屋がある。そしてその部屋からは，1本の坑道が水の底に向かい，それが出入口となっている。ほかにも，何本かの坑道がさまざまな方向に出ている。その部屋の中に，食糧にする水生植物の根をためている。

冬の間マスクラットは，丸屋根の上に葉や草をかぶせる。それは丸屋根の穴から，新鮮な空気が流れこんでくるようにするためである。さもないと穴が凍ってマスクラットは死んでしまう。

マスクラットの主食は，水生植物である。しかし，いくつかの巣穴では貝殻が見つかっている。マスクラットを飼育する場合のえさは，軟体動物でもよいというわけである。

水泳ぎの名手

19世紀初期のアメリカの博物学者オデュボンは，この動物の習性をたいへんうまく描写している。

「マスクラットが，自分の本拠にいるときは生き生きとして敏しょうである。かれらは，水中をあらゆる方向に進み，そのあとには，美しい水の輝きが残る。水から上がると，草むらや岩場でからだを休めている。水面に頭を出して，まったく静止しているのを見かけることもある。ときどき，ビーバーがやるように尾を動かし，やがて水のなかに姿を消す。マスクラットは安定した共同体を形成する。かれらのただ1つの望みは，人間やわなのないところで平和な生活をすることである」

北のほうにいるものの交尾期は，春から夏にかけてである。もっと南では，年間を通じて交尾が行なわれる。妊娠（にんしん）期間は22～30日で，1年に数回，3～9匹の子を生む。子は巣の中か，土のなかに掘られた穴で生まれ，きわめて早く大きくなる。

小さいときからなら，この齧歯（げっし）類はうまく飼いならせるが，成長してしまってからでは，人には食いつくし，手に負えないので，鉄のおりに入れなくてはならない。マスクラットの敵は，毛皮をほしがる人間のほかに，オオヤマネコ，キツネ，テン，ワシ，フクロウ，ミミズクなどである。

マスクラットの飼育は，ほかの多くの毛皮動物の飼育と同じように，大きな利益になるので，ずいぶん昔から行なわれている。毛皮の需要は絶えずふえているので，自然のもの



マスクラット。
水泳の達人マスクラットにとって
水中は，まるでわが家わが庭の趣がある。
足には幅広い水かきがあり，水中活動を助ける。
PH. VARIN-JACANA

マスクラット。
北アメリカの北緯30～69度の地域に生息している。
ヨーロッパにも少数ならいるが，数多くいるのは
水の豊かなマスクラット好みの地，カナダである。
PH. J. SIMON-PHOTO RESEARCHERS



だけではまかないきれない。

幸いなことに，マスクラットの飼育はかなりやさしく，収益は確実である。そのうえ，飼育の設備にはたいした費用もかからない。木がはえていて，日陰のあるわずかばかりの土地に，泉水か，かなり広い沼地があればじゅうぶんである。何よりもまず，マスクラットが逃げだすのを防ぎ，またほかの動物がはいってこないようにくふうした金網をめぐらす必要がある。

半ば放し飼いにする飼育方法では，囲いの中に一定数のつがいを入れる。毎日，人工食のほかに自然食も与える。この方法で，完全に管理することはできないにしても，動物を監視することはできる。このやり方は，経済的ではあるが，血縁交配で劣った品種となるため，4年ごとに動物の入れ替えをしなくてはならない。大きな囲いの中に，さらに小さな囲いを設け，それぞれのつがいをすまわせることで，血縁交配の防止もできる。

マスクラットは，北アメリカが原産地である。このネズミは，毛皮をたくさんとる目的で，ヨーロッパに連れていかれた。30年ほど前に，飼育場から何匹かが逃げだして野生化し，ヨーロッパのかなりの地域，ことにフランスのロアール川の北のほうの地方に侵入した。この思いがけないできごとに続いて，マスクラットがたいへんふえ，川沿いの農作物に大損害を与え，川の堤をもこわしてしまったという事件もあった。

レミング　*Lemmus lemmus*

レミングはキヌゲネズミ科レミング属に属し，体長およそ15センチ，そのうち約2センチが尾である。ときに尾のないのもいる。からだはずんぐりとして，頭部はかなり大きい。

耳は小さくまるみを帯びていて，ほとんど毛のなかに隠れている。密毛がからだをおおい，足のうらにまではえている。手にも足にも5本の指があり，指には土を掘るための強いつめをそなえている。

体毛は長く，密にはえていて，濃い黄色である。首にはしまがあって，黒ずんだはん紋がついている。黄色い縦じまが2本，目じりから出て後頭部にのびている。尾と四肢（し）も黄色である。

レミングはノルウェー，スウェーデン，フィンランド，ソビエトの北西部の山のなかや草の茂った平原に生息していて，水はきらいである。

この小動物は，魅力のある姿をしている。ちょっと見ると，ハムスターやマーモットを思わせるが，性質はとりわけハムスターに似ている。石やコケの下の小さな巣穴にすんでいる。活動的で，夜も昼も，休みなく，とてもすばやく跳びまわっていて，変わった鳴き声を出す。

冬，雪の下に長い坑道をつくり，そのなかに，歯でもって刻んだ草で編んだ，厚い間仕切りのある大きな巣をつくる。

雌の妊娠（にんしん）期間は20日から22日である。1年に数回，3～9匹の子を生む。

レミングはおもに，自分が生息している地域に固有の植物，すなわち草やコケやシラカバの実，そしてたぶん，草の根も食べる。この小動物は，大好きな地衣〔注1〕のはえているところまで，危険をおかしていくことがある。ただし，冬のために食物をためないか

マスクラット。ネズミ亜目キヌゲネズミ科。
毛皮獣として，相当数が飼育されている。
自然状態では，水生植物，貝類，昆虫などを食べる。
PH. L.LEE RUE



ら，きびしい寒さの間，かれらは首尾よく見つけだしたわずかな食物で生きつづけ，とくに，雪に埋もれた茂みから出ている芽を食べる。レミングは耕地には生息しないし，人家にもはいってこない。したがって，大きな害を与えることはない。

海にとびこむ集団自殺

ところで，この動物の自然増殖はめざましく，周期的にたいへんな数の増殖が起こる。その原因はまだわかっていない――おそらく，何かの宇宙現象に支配されるのであろう〔注2〕――。個体数が多くなりすぎると，その結果，時も所も決めずに行なわれる移動となる。

この移動のおもな原因は，おそらく，食糧の一時的な欠乏によるものであろう。もし，実り豊かな夏に続いて，冬がさほどきびしくなければ，その豊富な食物でレミングはめざましくふえる。個体数がふえると，生活空間が狭くなり，食糧が不足してくるので，レミングは新しい場所を求めて大旅行を始める。この移動では，規律のない群れとなって行進するが，各集団がどのように組まれるのかはよくわかっていない。

この《飢餓の行進》は，レミングを押しあいへしあいさせながら，ノルウェーの切り立ったがけにせまるフィヨルドの海へ身投げをさせてしまう〔注3〕。そこで，おびただしい数がおぼれ死んでしまうのだ。そこから伝説が生まれた。それによれば，レミングの大群が，潮の流れのように水面を泳ぎ，やがて船にしがみついてきて，無数のレミングの重みで，船が沈んでしまったというのである。

レミングは，移動している間にも繁殖を続ける。子を生んだ雌は，行進から離れて適当なところに腰をおちつける。さもなければ，雌は子を口にくわえたり，背負ったりして旅を続けていく。

レミングには，数多くの天敵がある。オオカミ，キツネ，クズリ（大型のアナグマ），テン，コイタチ，ミミズク，フクロウ，ノスリ，トビ，大小のカラス類，カササギである。トナカイもまたレミングを追い，前足で押しつぶしてしまう。また，スカンジナビア半島の北部などにすむラップ人は，食糧が足りなくなるとレミングを食べる。

ラグルスレミング *Lagurus lagurus*。
ネズミ亜目キヌゲネズミ科。
体長9～13センチ，尾長は約2センチある。
まわりにある美しい赤い花のようなものは
チャワンタケというキノコの一種である。（上）
PH. J. BURTON–PHOTO RESEARCHER



ラグルスレミング。
シベリア，モンゴル，北アメリカ北部などの
半砂ばくにすみ
草の根，コケ，シラカバの実など，植物を食べる。
習性はレミングに似ている。
PH. J. BURTON–PHOTO RESEARCHERS





ヨーロッパハムスター
Cricetus cricetus

ハムスターはキヌゲネズミ科に属しキヌゲネズミとも呼ばれるが，なかでももっともよく知られているのは，ヨーロッパハムスターとゴールデンハムスター *Mesocricetus auratus* である。両方とも，優美な動物である。

これからヨーロッパハムスターについて述べていこう。ヨーロッパハムスターは，全長およそ35センチで，そのうち尾長が5センチである。からだつきはずんぐりしていて，首は太く，鼻先はいくぶんとがっている。耳はすべすべした膜質で薄く，それほど大きくはない。目は突きでていて澄んでいる。四肢（しし）は短く，前足は4指，あと足は5指で，それぞれの指には，短くて透き通ったつめがある。

毛は密生し，柔らかいむく毛で，それにややかたくてもっと長い毛がまじっている。からだの背面は，一般に明るい黄かっ色である。ひとすじのかっ色の帯が首を巻いている。ほおには黄色いはん点があるが，口は白に近い。からだの腹面と四肢は黒く，足は白い。しかし，個体によって違いがあるから，あるものは全体が黒，くすんだ黄，白といった場合もある。

この齧歯（げっし）類は，中央および東ヨーロッパに分布し，シベリアの大部分にもひろがっている。また中央アジアでもみることができる。

ハムスターがよくすむ土地は，じゅうぶんにかたく，乾燥していて肥沃でなければならない。砂地を避けるのは，しっかりした巣穴がつくれないからだ。といっても，穴を掘る苦労を考えてか，あまりかわきすぎたり，岩の多い土地や，山岳や森林は避けて分布している。

地下にもぐった生活

巣は，深さ1，2メートルのところに掘られた，広い3本の坑道の中心にある。1本は入り口，2本めはこの部屋からの斜めの出口になっている。3本めの通路は，中央の部屋と食糧庫とを結んでいる。若いハムスターの巣穴は，年をとった雄や雌の巣よりも小さくて簡素である。

巣があるかどうかは，出口の目じるしとなる土の堆積や，巣の中に持ちこむコムギのからが散乱していることなどから，すぐにわかる。また，見つけた巣をハムスターがいま使っているかどうかもわけなくわかる。ハムス

レミング。ネズミ亜目キヌゲネズミ科。
体長およそ15センチ，尾長は2センチほどである。
ノルウェー，スウェーデン，フィンランドなど
高緯度地方のきびしい自然条件の地にすむ。
冬眠はせず，雪の下に坑道を作って活動する。（上）
PH. HANSSON-OSTMAN

レミングの母と子。
気候条件に恵まれると，異常な繁殖を始め
食糧不足になって移住を余儀なくされるが
その移住の途中でも雌は子を生み
子を口にくわえて大移動に加わるのもいる。（下）
PH. E.HOSKING

ゴールデンハムスター。ネズミ亜目キヌゲネズミ科。
体長約17，18センチ，尾長4センチほどである。
ヨーロッパハムスターにくらべ，やや小さい。
原産地は中央アジアである。（右）
PH. J.SIX



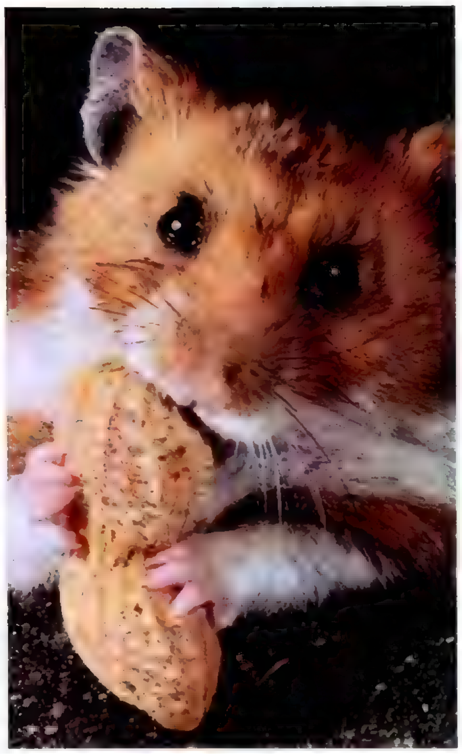






タテガミネズミの母と子。ネズミ亜目キヌゲネズミ科。体長は25～36センチ，尾長は15センチほどである。東アフリカの岩場地帯に限って生息する珍獣で，背の毛が長く，ヤマアラシのようにさか立てることができる。夜行性の草食動物である。

PH. DES BARTLETT–A. DENIS PROD.



ターがすんでいるときの巣穴は，絶えず出入りしているので内壁はすべすべしてつやがあり，見捨てられている場合には，コケやカビがはえ，また草でおおわれているからである。中央の部屋には，細いアシと短く切った草で壁がはってある。

秋が近くなると穀物倉庫はいっぱいになる。若いハムスターは１つの穀物倉だけで満足しているが，年をとったものは３～５個の倉庫をもち，その中には10キロに及ぶムギやジャガイモがはいっている。出口の坑道の中ほどで，中央の部屋から遠くないところにかなり広い空間があって，ハムスターはそこで排便する。

雌が出産に使う巣には，ふつうひとつの出口と何本かの入り口がある。出産するための床はまるく，直径はおよそ30センチで，高さは８～13センチである。そこにわらで産褥（さんじょく）をつくる。雌の巣の中で，たくわえた食糧を見つけることはあまりない。雌は，自分のためにはなんにも，ためこまないからである。

器用な化粧法

からだはずんぐりしているのにもかかわらず，ハムスターはいたって敏しょうである。はうような動き方をするが，それはちょこちょこと小さい歩幅で速く歩くからである。からだを動かすときには，腹部は土に触れる。そのためハムスターは少しでも早く前に出ようとして，ときには跳びはねることもある。



ミズハタネズミ。ネズミ亜目キヌゲネズミ科。
この潜水の名手の，得意そうな表情！
ミズハタネズミにとって水中は天国である。
イヌかきならぬネズミかきでスイスイ泳ぐ。
（**14**—10，11）
PH. J. BURTON-PHOTO RESEARGHERS

ゴールテンハムスター。ネズミ亜目キヌゲネズミ科。
ものを食べるときは，リスのようにあと足ですわり
前足で食物を持って口に運ぶ。
強い門歯でかたくとじた貝も食べてしまう。（上左）
PH. E.P.S.

ゴールテンハムスター。
ヨーロッパハムスターよりも，性格はおとなしく
医学実験用動物として，またペットとして
人気のある動物である。
PH. J.SIA

土を掘るのがうまくて，前足でもって掘るが，土がかたければ歯を使う。ついで掘り起こした土を腹の下に移し，あと足で自分の後ろに押しのける。土がたまると，後ずさりして掘り起こした土の大きな堆積を外へ押しやるのだ。しかし，むかし信じられたように，ほお袋に土を詰めることはない。

泳ぎはうまいが水にはいるのは好まない。もしも水にはいると，あとは念を入れて毛をきれいにする。２本の前足は手の役目をするから，食物を口に運ぶのも，穂から実をとるのにも前足を使う。そして穀粒はまずほお袋に入れておく。

顔を洗うときは前足を耳の高さまで上げる。お化粧をするときは，何回も口先に手をまわして，顔の毛のつやだしをする。そしてそのうえ，まったくかわききるまで力をこめてこする。こんなふうにしてお化粧に気をとられているときに不意をうたれると，びっくりしてすぐにあと足で立ちあがる。

激しい攻撃性

ハムスターの感覚はみな発達している。とてもおこりっぽいので，ごくささいなことでも低いうなり声をたて，歯ぎしりをして身を守る姿勢をとる。もし襲われでもしようものなら勇ましく身を守り，油断しているところをねらって襲いかかるイヌにも，勝つことさえある。猛禽（もうきん）類とも戦うし，人間がうるさくかまったりすると，人間にも襲いかかって歯で衣服に食いつき，たとえ殺されてもかじりついて離れない。

雄と雌のあいだでは，絶えまなくいさかいが起こる。この争いで雌が死ぬことがよくある。平和なのは交尾期間だけである。飼われているハムスターどうしでも争う。ふつうは，若いハムスターのほうがおとなしい。しかし，母親の違う子が，１つのかごに入れられると，たちまち戦いを始める。

ハムスターの攻撃的な性質は，かごの中にハリネズミを入れてみるとよくわかる。はじめは，はいってきたハリネズミを珍しそうにじっと見ている。ハリネズミがハムスターのそばへ寄っていくと，ハムスターはうなりながら一撃を加えようとする。ハリネズミは，すぐからだを丸めて針の球になる。もしこの針の球に襲いかかると，ハムスターは鼻面を血だらけにしてしまうに違いない。そこでハムスターは，ハリネズミに足げりをくわせようとするが，それもまた恐ろしい針に見舞われるだけである。

ハムスターは，怒り，うなり，歯をむきだして，またハリネズミにとびかかろうとする。けれども敵の着ているよろいは，ハムスターがとびかかったとしてもなんの効果もない。それがまた，ハムスターをますます興奮させるのである。形勢がまったく不利となって身動きもできなくなると，ハムスターはとてもこっけいな，困りきったようすをして相手をぐっとにらみつける。そして自分の怒りを，こんどは自分たちの仲間に向ける。もし偶然に，ハリネズミが丸めたからだを伸ばすと，再び戦いが始まる。

ハムスターは自分よりも小さい動物を，容赦なく狩りたてる。たとえば，ひな鳥，小型のネズミ，トカゲ，ヘビとか昆虫（こんちゅう）類である。こういったものが，ハムスターはもともと好きなのだ。しかし，植物性のものをも食べ，またバターやチーズもきらいではない。こういったことからみて，ハムスターはまったくの雑食性の動物とされているのである。

ハムスターの１年間

冬になると，ハムスターは冬眠状態にはいる。その間に，何回か目をさまして，大小便をし，食物を食べる。２，３月のころ，凍った大地がゆるみ始めると，ハムスターは完全に目をさます。けれどもすぐには巣穴を開かない。たくわえておいた食べ物がある間は，そのまま巣にいる。

雄は３月の半ばに外に出るが，雌のほうは少し遅れて４月のはじめに出てくる。かれらは次の冬にそなえて，あらためて巣を掘る。これが終わると交尾期が始まる。このときには，雄が雌の巣穴に出かけていく。

しばらくは仲良く暮らし，情愛に結ばれて，たがいに勇ましくかばいあう。雌たちを自分のものにしようとして，雄のあいだでは，しばしば激しい戦いが起こる。年をとったハムスターには深い傷のあとを残しているものがある。妊娠（にんしん）すると，雌は自分の相手を遠ざけ，ときには外に追いだしてしまう。雄雌は再び，もとの殺しあう敵どうしとなるのである。

妊娠期間は４，５週間で，６匹から18匹の子が生まれる。子には毛がなく，目は見えないがすでに歯がはえていて，非常に早く育つ。母親は注意深く子どもの世話をする。そのときに，親のない子を養うこともある。子は，２週間たつともう自分で土を掘ることができるようになるから，母親のそばを離れて完全に独立してしまう。

農作物が実るころ，ハムスターはたいへん忙しい。冬の食物をたくわえ始めるからである。それぞれが自分の巣穴の中に，コムギ，ジャガイモ，それから何よりの好物であるアマの実，ソラマメ，エンドウなどをたくわえておく。

一般に，ハムスターが活動する時間は，夕方から夜半までと，日の出前のほんの少しの間である。

前足を使って，丈の高いコムギの茎を曲げ



ゴールデンハムスターの母と子。
子は無毛，閉眼で生まれるが，歯ははえている。
生後２週間もすれば，土を掘ることができ
母親から離れて独立していく。

PH. J.SIX



ハムスターの白毛体。ネズミ亜目キヌゲネズミ科。
食物を食べきれないとみてとると
ほお袋にためこみ，自分の巣に運んでたくわえる。
体側のふくらみが，ほお袋である。

PH. BUZZINI

る。そうしておいて穂から穀粒をかじりとって，ほお袋に入れる。ほお袋がいっぱいになったところといったら，とてもこっけいだ。こんなときは，ハムスターを手づかみでつかまえることもできる。というのは，ほお袋がふくらんでしまっているので，かみつけなくなっているからだ。しかしハムスターは，穀粒を吐きだして，ほお袋をまたたく間にからにすることができる。

10月のはじめ，寒くなって田畑がはだかになると，ハムスターは巣の中にはいって坑道をふさぐ。それからふんだんに食べ，ハリネズミのようにからだを丸くして眠りにはいる。心臓も止まったように眠っているが，実際には，毎分14回から15回の緩慢なリズムでうっている。

目をさます前に，こわばったからだをゆすって柔らかくしていく。それから，伸びをし，あくびをし，目をあけ，すわろうとして倒れたり，もう一度からだを起こし，ぼんやりしたようすで何歩か歩き始める。これが冬眠からの目ざめの情景である。

飼われて暖かいところにいるハムスターは，1年じゅう冬眠しないでいることもできるが，その影響だろうか，そのハムスターは早死にしてしまう。

ハムスターに多くの天敵があるということは，人間にとって幸いである。というのも，この動物はおびただしくふえるのと，農作物に非常な害を与えるからである。ノスリ，フクロウ，カラスなどの鳥たちがハムスターをしつこく追いまわす。また，ケナガイタチやイタチは，巣穴の中までも追いかけていく。

人間もまた，ハムスターを追っている。ヨーロッパなどの農夫のなかには，ハムスター狩りを本業にしている者もいた。1匹つかまえるごとに奨励金が出るということもあったが，最大の目的は巣穴の中のハムスターの貯蔵食糧を見つけることで，これが大きな収益になるのである。巣から取りもどしたコムギを洗って，よく自分の収穫物に加えたものである。

ハムスターの皮は軽くてじょうぶなのだが，その値うちほどには利用されていないようだ。しかし，ヨーロッパのある地方では，ハムスターの肉も喜んで食べられている。

ゴールデンハムスターは，中央アジアが原産地で，今まで述べてきたヨーロッパハムスターよりも小さく，毛の色はもっと色彩豊かである。その性質はおとなしくて，飼いやすいから，実験用動物や愛玩動物として利用され，子どもたちのお気に入りのペットにもなっている。



ハムスター。ネズミ亜目キヌゲネズミ科。
中・東部ヨーロッパ，シベリア，中央アジアにすみ
個体によって白，黒，かっ色などの毛色の相違がある。
PH. J.SIA

リス亜目　*Sciuromorpha*

齧歯（げっし）類の単歯区の動物群で，最後の亜目はリス類である。この亜目はリスで代表される，どちらかといえば，すらりとした体形をもつ動物たちである。この動物の特徴は眼窩下孔（がんかかこう）〔注4〕がないのと，2本のすねの骨――脛骨と腓骨――が分離していることである。ここではビーバー科，ホリリス科，リス科，アフリカウサギモドキ科を調べよう。

ビーバー科　*Castoridae*

ビーバー科の動物は，水生生活に適応していて，次のような特徴がある。

- ●ずんぐりした体形。
- ●瞬膜〔注5〕のある小さな目。
- ●5本の指のある四肢（しし），そして後肢（こうし）の指には水かきがある。
- ●脛骨と腓骨は，それぞれもとのほうが結合しているが，全体が癒着しているわけではない。
- ●尾の切断面は大きく，きわめて扁平で，尾の表面は細かいうろこでおおわれている。

この齧歯類は川のそばに生息している。植物を材料にして，じょうずに水の流れをせきとめて水たまりをつくる。分布地域は，ヨーロッパ，北アジア，北アメリカにひろがっている。この科の齧歯類は1属1種，つまりビーバーだけである。

ビーバー　*Castor fiber*

すでに古代において，ビーバーは学者たちの関心を集めていた。かれらは《カストール・castor》または《フィベール・fiber》という名まえで，たくさんの幻想的な伝説の主人公だった。アリストテレスは，ビーバーはカワウソと同じように，湖や川から食糧をあさっている四足獣の1つであるということだけを語っている。また，大プリニウスは，この動物はものをかむ力が強く，おののような歯で木を倒すことのできる動物で，魚の尾に似た尾をもっていると断言している。

今日，多くの学者たちがビーバー *Castor fiber* は1種である，と考えている。しかし，ある学者たちは，ヨーロッパビーバー *Castor fiber fiber* とカナダビーバー *Castor fiber canadensis* の2亜種に分類することもある。しかし，その差も鼻先の丸みの具合や，頭骨の形，からだの色といった程度で，どちらも習性などはよく似ている。したがってここでは，2つをまとめて述べることにしよう。

ビーバーは，もっとも大きい齧歯獣の1つ



といえる。成長した雄の体長は，20～30センチの尾長を別にして，80～120センチである。ヨーロッパビーバーは小さくて，80～90センチくらいまでである。地上から肩の部分までは30センチ余りで，体重は20キロから30キロもある。

からだつきはずんぐりとして，がんじょうにできていて，胴まわりも腰のほうが大きい。頭部も後ろへいくほどひろがっている。鼻先は短くて丸い。足は短くてじょうぶで，指は5本ある。あと足の指は，幅の広い水かきで結ばれている。尾はつけ根のほうでは丸いが，先へいくにしたがって扁平になり，15～20センチの幅のへらのような形となっている。耳はほとんど完全に毛でおおわれている。

からだの毛並みは，ふつう絹のような手ざわりのよい密生したむく毛と，長くてまばらにはえた剛毛とからなっている。剛毛は，つやつやしたかっ色で，5センチくらいの長さである。からだの背面は濃いクリ色で，灰色がかった輝きが見られる。腹面は背面よりも明るく，黄色を帯びたねずみ色である。長い毛が尾のつけ根を飾っているが，尾には毛がなく，黒っぽい色をした細かいうろこが見られる。

しかし毛皮の色調は，個体によって著しく違っている。黒っぽいもの，灰色をしたもの，さらに赤みがかった白いものさえいる。きわめて少ないが，白くてはん点のあるビーバーもいる。

門歯は大きくてじょうぶで，あごの先端に突きだしている。雌も雄も，肛門（こうもん）部に特殊な腺（せん）がある。その腺は《サック（囊）》，あるいは《油囊》と呼ばれている。腺の壁面から，カストロレウム——海狸香——を分泌（ぶんぴ）する。これは赤かっ色，黄かっ色，あるいは黒かっ色の濃い油性の物質である。これのにおいは強く鼻をさし，その味は苦い。20世紀のはじめまで，ヨーロッパなどでは浣腸薬（かんちょうやく）として使われ，現在は香料として使われている。

ヨーロッパビーバーは，ドイツ，ポーランド，ソビエトに生息している。フランスにも少しはいる。スカンジナビア半島とスイスのジュネーブ湖に移されたが，スカンジナビア半島では繁殖している。そのほかシベリアおよび北モンゴルに分布している。

カナダビーバーは北アメリカの大部分，とくにカナダに生息し，カナダでは一時は乱獲によって，種の保存がむずかしくなったが，今では完全に保護されている。

ビーバーは，たいていの場合つがいで，樹木の多い，水辺の土地にすんでいる。静かで人けのない場所に，かなり多くの子どもたちといっしょに，家族単位の集団をつくる。

ビーバーが水たまりをつくるときには，あたりの地勢，利用しやすい水面の状態，周囲の植物のはえ方などに注意する。生息する地方によって，水たまりのつくり方にはそれぞれ固有の伝統がある。

ビーバー　リス亜目ビーバー科
齧歯類のなかでは大きな動物の1つに数えられ
体長80～120センチ，尾長20～30センチある
強い門歯で木を切り倒し，円筒状に切断して
小屋やダムをつくるための建材とする
PH. RUSS KINNE-PHOTO RESEARCHERS



すぐれたダム建造力

ヨーロッパとシベリアのビーバーは，土手のなかに，人目につかない巣をつくる。入り口の坑道は水のなかに抜け，したがって穴の一部は水につかっている。ときには，何本かの入り口があるときがある。どの道も玄関とでもいうべき第1室に通じている。ビーバーはそこで毛にしみこんだ水を振るいおとす。玄関は居間に続いているが，そこはいちだん高くなっていて家族がすんでいる。

天井には1つの抜け穴があって，それがじゅうぶんに換気口の役割を果たしている。また，巣全体がたくさんの小さな枝でおおわれているが，それで換気口や坑道の口を隠している。この小枝を積みあげたものは《薪の車》と呼ばれる。これは巣を敵から守り，雨水の流れを住居の外に出す役目をしている。こういった構造の巣穴は，堅固で，水位よりいちだん高い土手につくるのに適している。

ビーバーがつくるもっとも注目すべき建物は，《小屋》である。これはきれいな水に囲まれた，小高いところに建てられている。小屋は薪や小枝でつくられ，それがどろで固められている。あと足を使ってどろを塗りこめたものである。小屋には1つから数個の入り口があって，坑道は水のなかに抜けている。こういった水のなかの小屋がいくつも建つので，《村》ができる。

小屋の中には，からだをかわかす玄関と，居室とがある。ビーバーは，水位が上がると居室をかさあげする。それ以上に増水して，水が居室に浸入してくると，自分の小屋の屋根の上に仮の避難所をこしらえる。

これらの小屋の外観は半球体で，小枝でおおわれている。間仕切り壁の厚さは平均30センチで，小屋の天井は一般に水面より1メートル上にある。しかし天井の高さは決まってはいない。それは，ビーバーの子どもたちが，次々に居室の土間に屑物を置くので，ときどき屋根を高くしなければならないからである。小屋の直径も同じ理由で変化するが，平均して2.5メートルである。

これらの小屋は，防湿性の屋根組みのおかげで，保温性があり，中の気温はほとんど一定に保たれるようになっているから，雪が屋根に積もっても室温は下がらない。

ビーバーは3世代にもわたって同じ場所に同居していて，およそ14匹にもなることがある。そのために子どもたちは，2年たつとどこかへ移っていかなくてはならない。

ビーバーは親の巣，すなわち小屋を出ると，土手につがいで巣をつくって冬を越し，翌年《小屋》をつくって移りすむのである。

小屋の周囲のなわ張りの範囲は，カストロレウムの臭跡で境目が決められ，定期的に新しい臭跡がつけられる。

小屋の外では，ビーバーの《村》の住民は，一般に共同で作業をする。それは川や湖や沼をせきとめる堰をつくるためである。この堰は，水のなかにある坑道の入り口を守るためのもので，水位を調節するのに必要である。原則として堰は，小屋の下流に設けられる。水の底で木の幹を石と土で動かぬようにし，その上に枝を複雑に組み合わせたものである。

この堰は，長さが5メートルくらいから600メートルくらいにも及ぶものがあり，高さも数メートルといった巨大なものである。

ビーバーはこの堰に，いつも気を配って，こわれないようにしている。たとえば沼のように，水位の変化のない水面でも，やはりか



ビーバー。リス亜目ビーバー科。
ウミダヌキ(海狸)とはビーバーの別名だが
海ならぬ川や湖にすみつき，水辺に巣をつくる。
水かきのついたあと足と舵の役をする扁平な尾で
水中を自由自在に泳ぎまわる。(上)
PH. SIMON-OSTMAN

ビーバー。
ビーバーの巣は沼や湖の岸べの土手に
直径1.5～2メートルの広さに掘られ
入り口の1つは水中に抜けている。
このように小枝などを重ねて屋根とする。(下)
PH. J.SIMON-OSTMAN



れらは堰を見まわっている。このことは，ビーバーが合理的に考えて行動しているわけではないことを示している。そのあふれるような活動性は本能的なものであって，それがしばしばビーバーをかりたてて，役にたたない作業をやらせるのだと思われる。

人間が出入りしない森のなかに，今なお，きわめて古い巣が見つけられることがある。19世紀のアメリカの博物学を指導したアガシーは，自分の発見した堰を調べているうちに，堰をつくっている幹や枝が，厚さ3メートルの泥炭の層におおわれていることに注目した。このことからかれは，この堰が，少なくとも900年前につくられたものだという結論をだした。かれはまた，ビーバーのこの建造物によって，その地域の地形が著しく変わったということを述べている。

堰は，森を横切って静かに流れている川を，一連の広い沼に変えることができるのだ。ビーバーは大量の樹木を倒して，この水の近くに，自然のものではない林間のあき地をつくりだす。それは《ビーバーの草原》と呼ばれ，その大きなものは100ヘクタール以上にも及ぶことがある。



ビーバー。
ビーバーは家族的な共同体をつくって生活する。
北アメリカ，ヨーロッパ，シベリアなどに生息するが
今は数が非常に少なくなり，保護されている。（上）
PH. KLAGES - ATLAS - PHOTO

ビーバー。
ビーバーの毛皮も，非常に高価で珍重される。
肛門部にある腺から出される一種の香料は
カストロレウムと呼ばれ，香水に使われる。（下）
PH. A. PALAUS - SOLER



ビーバーは，このような堰を作って流れを止めてできた池のまん中に，小枝で小屋を建造する。堰は，大きいものでは高さ数メートル長さ600メートルにも達する。

PH. DES BARTLETT

日本のネズミ（2）

――本州産の野ネズミ――

徳田御稔

第13号の解説につづいて本州産のネズミについて述べよう。

本州産の野ネズミは，このページの表でもわかるように6種である。そして，それぞれの種が，朝鮮や中国東北部，あるいは中国西南部（四川・雲南地方）に分布している種と共通する特徴をそなえている。だから，黄海が陸地であったような時代には同一の種であったものが，本州，四国，九州が大陸から切り離されてから，分化し，日本特産種となっていったものと思われる。北海道の種が大陸の種から亜種化しているのにくらべ，本州産のものはさらに種分化の程度が大きいといえる。

本州と関連深い四国，九州

本州にいる種の全部が，四国，九州にもいるわけではない。だが，四国，九州にいる種はまったく本州のものと同種である。したがって，本州，四国，九州がそれぞれ独立した島の地形になった歴史は，ごく新しいということができる。

また，本州，国国，九州の陸棚(りくだな)の延長線上にある島々，屋久島，種子島（以上鹿児島県），壱岐，対島（以上長崎県），隠岐（島根県），佐渡（新潟県）などにいる野ネズミの種類は少ないが，それらは本州のものに近い種である。これらの島もわりあいに新しく離島化したのであろう。

一方，屋久島を越え，奄美大島あるいは琉球諸島にいくと，そこではネズミの種類ががらりと変わる。そのことはあとの巻の解説で述べることにしたい。

本州にいる野ネズミ

本州，四国，九州にいるカヤネズミの生態は，第13号本文のヨーロッパのものと大差ない。日本のヒメネズミは，形態や生態はほぼヨーロッパのものに似ているが，冬にも活動力が停滞することがないという相違点がある。

アカネズミは，北海道のエゾアカネズミに近い種であるが，本州ではこれがもっとも優勢な野ネズミである。

キヌゲネズミ科では，スミスネズミの分布がもっとも広く，本州，四国，九州の各地にいる。形は小さく，第13号本文のユキハタネズミに似ている。ただし，両者は属が違うから，その類似は収斂(しゅうれん)現象――系統の違う生物が生活環境の似ていることで，似てくる現象――とみるべきである。

スミスネズミは体長10センチ，尾長4センチほどで，山麓(さんろく)地帯にいて，高い山にも登る。頭骨が扁平(へんぺい)で，石の下にもぐりこむのにつごうがよいので，岩の多い場所では，ほかの野ネズミよりも数が多い。背面の毛が赤みを帯びた鮮明なかっ色をしているので，日本産のキヌゲネズミ類ではもっとも美しい。

これと近縁の種にヤチネズミがある。しかし，スミスネズミほど広く分布せずほとんど本州の中部以北にしかいない。ヤチネズミはスミスネズミよりからだが少し大きく，体長13センチ，尾長5センチほどである。食性は草食にかたよっているようだ。そして臼歯は終生のびつづけているのである。スミスネズミ，ハタネズミがそれぞれ隠岐や佐渡に分布して



スミスネズミ　京都市貴船にて　撮影　坂口浩平

本州，四国，九州に分布する野ネズミ

和名および学名	備考
ネズミ科 *Muridae*	
アカネズミ *Apodemus speciosus*	北海道のエゾアカネズミに近い
ヒメネズミ *Apodemus geisha*	北海道に分布するものと同種 種名を*argenteus*とすることもある
カヤネズミ *Micromys japonicus*	生態などヨーロッパのものに近い
キヌゲネズミ科 *Cricetidae*	
スミスネズミ *Anteliomys smithii*	属名を*Eothenomys*，または*Phaulomys*ともする
ヤチネズミ *Clethrionomys andersoni*	属名を*Aschizomys*ともする 分布は本州中部以北および和歌山県
ハタネズミ *Microtus montebelli*	四国には分布しない

いるのにくらべ，このネズミは離島にはまったくいない。つまり，狭い分布圏しかもたない退えい的な種である。

一方，ハタネズミはアカネズミにつぐ有力な種である。そのからだつきは，第13号本文のアルバリスハタネズミにもっとも近いが，アルバリスハタネズミはアジアにもいる広域分布種であるから，類縁関係がないとはいえない。また，土を掘るのがうまいこと，幅広い植物食であること，集団的生活をすることなど，両者の生態面もよく似ている。

ハタネズミは体長12センチ，尾長4センチほどである。本来，平原にすみ，田のあぜなどをかっこうのすみかとしているから，農作物に大損害を与えることがある。また，休耕して草をはやしている畑などはこのうえないすみ場所で，大きな集団がつくられたりする。平地で個体数がふえると，山地にはいって生活する集団が生まれ，ヒノキの若木などが食い荒らされる。集団をつくることと，移動することがハタネズミの大きな特徴で，それは遠い親類のレミングにおいてとくに顕著である。しかし，日本にはレミングもハムスターもいない。■

日本の水生齧歯類

本文にある水生齧歯類は，日本にはいない。南アメリカ原産のヌートリアが，飼育場から逃げだして野生生活を始めたこともあるが，分布はそれほどひろがらなかった。水生動物の生活空間は，日本では食虫類のカワネズミが占めている。といっても，この動物はドブネズミほどの大きさで，田のあぜを流れる小川などにすむだけである。大陸のような，大きな河川の河岸環境などない日本には，大型の水生齧歯類のすむ場所がないわけで，当然この動物がいないということになる。

ミズハタネズミにしても，マスクラットにしても河川の岸べにすむ動物はたいてい大きなからだをしている。水中のもの，陸のものを広く食べるためであろう。ビーバーはリス亜目だがやはり大きなからだをしている。それも豊かな食物と安全な環境に恵まれているからといえよう。■

ネズミの口ヒゲ

哺乳類の口や目の周辺，ほおには長い剛毛がはえている。これは毛嚢（もうのう）内で神経と結び，触覚の鋭敏なアンテナである。夜行性動物ではとくによく口ひげが発達している。家ネズミも，暗やみで行動するから，その際に長い口ひげが大いに役だつ。だからこれをはさみで切り取ると歩けなくなる。昼行性で水生のミズブタは，口ひげが非常に短い。穴を掘る動物では，手足の剛毛に触感力があり，コウモリでは飛膜に触毛がある。■

カラーページ注

〔注1〕 **地衣**　菌類とコケ類が共生してつくっている特殊な共同体で，樹皮や岩石に着生している。

〔注2〕 **レミングの大発生**　古くから注目されていた現象だが，それを説明する決定的な結論はまだない。3,4年の周期で起こっているので，その原因を太陽の黒点と関係づけて議論したこともあった。もっとも最近では，レミングの生態と関係づけて解釈されるようになっている。ふつう大発生するまでには準備期間があるはずで，したがって1,2年先までさかのぼって個体数が増加していく状況を追究しなければならない。

レミングは春になって繁殖を始めるが，その冬の越冬条件がよく，多くの個体が越冬に成功すれば，有力に繁殖する個体が多くなるわけだから，越冬にはいる個体数とその構成が問題となる。こうして個体数の継続的増加と気候条件，食物の豊富さなどがからみあい，3,4年ごとに大発生をもたらす，と解釈される。

一般に，大発生は繁殖力のおう盛なネズミのなかに起こりやすい特有の現象で，さらに草食性で集団をつくる傾向のものに起こりやすいといえる。

〔注3〕 **レミングの集団自殺**　開高健の小説「パニック」には，信州で大発生した野ネズミの大群が，湖水に突入して大量死する状況が書かれている。このネズミはハタネズミで，集団的に小移動することはあっても，大旅行や，集団死はしない。たぶんレミングの例をヒントにしたものであろう。

レミングが盲目的な行動を起こすことについては，いまではストレス説で説明される。ネズミの飼育密度を高めると副腎の重量が増加し，逆に生殖腺の重量が低下することが認められ，副腎皮質から分泌されるホルモンの異常が，動物を精神的不安定におとしいれることがわかってきた。そこから，レミング大発生後の大移動の原因として，集団的狂気，ヒステリーという心理的な裏づけができる。

ふえすぎた他の種でも集団自殺をするのだろうか。レミングのような例は高等なネズミにはみられない。〝餓死〟が大発生の決着をつけていると思われる。〝共食い〟をするという説もある。30年前の夏，エトロフ沖の難破船で1000頭以上のドブネズミが食糧を食いつぶして右往左往しているのを見たが，その際でも共食いが始まっているようには観察されなかった。わたしは共食い説を一般化することには疑問をもっている。

〔注4〕 **眼窩下孔**　眼球のはいる穴の前下方にある孔。（第11号解説参照）

〔注5〕 **瞬膜**　眼球上を横にひろがっておおう薄膜で，この膜があるために水中で目をあけていられる。■（徳田御稔）

アマゾン川の怪魚・珍魚

保田正人

奥地の日本人移民村

河口の幅が東京から静岡にとどくほど広く、2000キロもさかのぼった中流でも、東京湾の出口、浦賀水道ほどもあるアマゾン川は、日本の川の概念をまったく越えたものである。茫洋とひろがる水と、はてしなく続く原始林と、白雲の浮かぶ青空だけの世界である。ガンジスやナイル川のような古代文化を生み忘れたこの川は、今も未開のまま残され、川岸に開かれた町々と20ほどの日本移民の開拓村が、点の状態で文明社会を形成している。かつてはマラリヤや黄熱病の巣として、緑の魔境の呼び名のとおり恐れられたものだが、今は開拓地の風土病も根絶え、平和な生活の場所となり、日本人もアマゾン開発の先達として、約1万人が活躍している。

人の住まぬ林のなかには、猛獣こそ少ないが、ワニ、大蛇、毒ヘビ、毒グモ、サソリのほか、3センチもある大アリなどがすんでいる。木々の間をオウムが飛びかい、神秘的に光る「太陽の蝶モルフ」も舞っている。川には美しい熱帯魚から、えたいの知れない風変わりなものや、とてつもない巨魚まで生息している。大昔、アマゾン平原は海だったそうだ。大地の変動で、海は川に変わり、逃げおくれた魚は海の魚の形のまま、何百万年の間に淡水にならされてしまったものも少なくない。

数年前、支流の1つマディラ川の上流奥深くに開かれた日本移民村を訪れた。この川岸の砂泥には、長さが1メートルもあるシビレエイがいる。魚つりを楽しむ移住者が、この毒刺にさされて苦しんでいた。この川の中流には大きな滝があって、海の魚や下流の魚はさかのぼれないのに、イルカがはね、マナガツオやフグに似た魚も泳いでいる。釣りあげたタンバキー（アマゾン鯛）のさしみに、故郷の味をしのんだものだ。

朝市に並ぶ珍商品

川沿いの町では、毎朝、野外の市がたつ。河口に近いベレン（人口40万）のベル・オ・ペソや、中流マナオス（人口20万）の水上部落（最近州政府によって陸にあげられた）はとくに有名である。河岸の埠頭には、カノア（丸木舟）や帆舟がすきまのないほどひしめき、あき地には足の踏み場もないほど、あらゆる商品が並べられる。ナマケモノ、アリクイ、インコ、ときにはおりに入れられた大蛇やワニまでが売られている。巨魚、怪魚をふくめ魚も種類が多い。子どもぐらいは楽にのみこめそうな、口の大きなピライーバ（ナマズ）には驚かされた。大きなものは、1.5メートルもあろうか。このあたりで川づりをすると、つり糸の先でお目にかかる魚の70パーセントはナマズの親類筋だ。

6月から10月のヴァザンテ（減水期）には、魚屋はカジキに似た大きな切り身を並べ、乾物屋には1メートルもある干し魚がつるされる。ピラルクーである。ブラジルの母国ポルトガル人の好んだ干し鱈料理の代用品として、アマゾン開拓者には欠かせないものである。バカリャウ・ブラジレーロ（ブラジルの干し鱈）が正しい名まえだが、日本移民は舌をかみそうな発音をきらって、バカヤローで取引きをしている。うろこは白地で上端が黒くて美しく、大きなものは10センチもある。表面が目の細かい紙やすりのようになっていて、セニョリータが好んでつめみがきに使う。舌（舌骨）もまた大きく20センチに達するものもあり、干せばりっぱなやすりになる。町かどで老人が、これで不老長寿の妙薬、ガラナの実をすりおろしていた。



マナオス市水上部落の朝市　早朝どこからともなく小舟が集まり、市が立つ

ピラルクー漁は、日本のカジキ突きん棒と、原始的な捕鯨をつきまぜたようなものだ。幅50センチ、長さが3メートルほどの不安定なカノアに乗りこんだ漁師は、綱のついたアルポン（もりの一種）を、浅瀬に群がる魚めがけて空高く投げあげる。その落下速度を利用して、かたい魚体にもりを突き刺す。百発百中、熟練とはいえ実にじょうずなものだ。あばれ狂う巨魚を綱一本で巧みにあやつるので、非常に危険な漁だ。

太古の化石魚甲冑（かっちゅう）類のようにからだを武装した、錆色のグロテスクなこの魚は、包丁の刃が欠けるほどかたい。熟し柿のような毒々しい肉の色をみると、ちょっと食欲はわかないが、味はけっこうおいしい。この種の魚は、日本ではまったくみかけないもので、日本移民はヨロイウオと呼んでいる。みそ汁にいれてよく食べるが、パーム油のような油滴がぎらぎらと浮きあがっていた。

カランゲージョと呼ばれる大きな毛ガニは、つぼ形に荒っぽく編まれた竹かごに詰められている。川エビも多く、干して煮干しの代用にされる。シジミやタニシのような食用貝には、お目にかかれなかったが、びっくりするほど大きなドブガイが生息すると聞いた。ここでも、日本人は生魚をさしみにしてよく食べるが、ジストマのような寄生虫の心配についてはまったくわからない。

楽天的なブラジル人

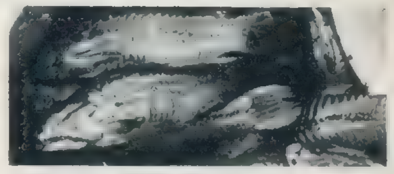
魚とは関係のない話だが、カニかごの竹はモウソウチク（孟宗竹）に似ているが、粘りがなく、竹竿とか細工用にはむかず、ほとんど利用されていない。タケノコは日本人だけが食べているが、他人の竹やぶにはえたものを勝手にちょうだいすることは、アマゾンでも許されない。しかし、折れたタケノコを拾うことはさしつかえない。ふたりが組んで、ひとりがつまずいたふりでタケノコをけとばして折る。それをあとの人が拾う。合法だが、少々話ができすぎているので、あるいはブラジル人好みのピアーダ（風刺を入れた落し話）かもしれない。

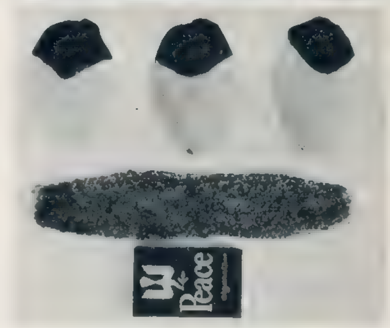
複雑な法律をもった国だが、法の運用となると、実におおらかである。このような、ピアーダを地でいくようなことにしばしばぶつかる。楽天的なブラジレーロの茶飲み話には、魚の話にしても尾ひれがつきやすく、ときには真実か、うそか、ピアーダなのか判断に苦しむ。

マナオスの料亭で、50センチもある大川ガメ・ピチューの料理が出された。このカメは資源保護のため、捕獲が禁止されているはずである。不審顔でたずねると、禁漁直前に捕えていたとの答えだった。どうも信じかねることばである。



上はアマゾン川の大ナマズ“ピライーバ”　中は生ける化石魚ピラルクー　下は、やすりにもなるその舌骨と、大きなうろこ





種類が多く、珍しさ、美しさで有名なアマゾン熱帯魚は、輸出が止められている。各地から集められた魚が、申しわけのような小さな養魚池にほうりこまれる。人工養殖魚は禁輸のわく外のため、翌日になれば、この池で生まれ育った魚に化けて、飛行機で世界各地に運ばれるのである。

吸血魚、電気魚など

恐ろしい魚の代表格にされている吸血魚ピラニアは、比較的上流の濁水中にすんでおり、場所によってはまったく姿をみない。日本では映画や本を通して、その害が少し誇張されている。そのくせ実物を知っている人は比較的少ない。この川には、ピラニアのような、血を好む魚が10種類はいる。ドジョウを小さく細くしたようなカンジェロは、上下数本の鋭い歯をもち、かみつくやいなやからだを一回転させ、肉を丸くくりぬいてからだに食いこんでいく。針金のように細いアグリヤも、ところかまわずヒルのように吸いつくのできらわれている。チスイコウモリに襲われたニワトリが、痛みを感じないまま血を吸いとられるように、この魚にかまれても、あまり痛まないそうだ。ブラケ（デンキウナギ）は湿地帯にすみ、ジュート（黄麻）栽培の作業中に、うっかりふれてショックを受けることがある。本には、ウマでも死ぬことがあると書いてあるが、現地の人は命に別状はないといっていた。

海のギャングに挑戦する，サメ研究所

野生動物こんにちは 11

はえなわにかかった人食いザメ



アメリカの南端，フロリダ半島のサラソーターにモート海洋研究所がある。所長は，ギルバート博士で，すでにサメ研究30年のキャリアをもっている。

そこでわたしたちは，まずサメのいけすに案内された。直径約10メートルのプールには，タイガー・シャーク，ダスキン・シャーク，レモン・シャークなどが美しい泳ぎを見せている。しかし，飼育係の投げこむ血のしたたる肉塊を奪いあう姿は，まさに壮絶であり，人食いザメの恐ろしさをまざまざと見せていた。

サメ狩り船に乗って

あらしが去って，うそのように雲が切れた日，ギルバート博士みずから陣頭に立って，サメの生けどりに出かけることになった。生けどり法は，はえなわ漁法である。まず，はえなわを青く澄んだメキシコ湾の沖に仕掛けておく。人食いザメは，それにつけたクジラ肉におびき寄せられて，パクリと食いつくのだ。

翌日，はえなわを巡ってみたが，その日は不漁で，ブラウン・シャーク5匹がひっかかっていただけだった。生けどったサメは運搬船に入れて，モート海洋研究所のプールまで運んでいく。

傷ついたサメは，神経が過敏になり危険なので，研究員はまず麻酔薬をサメに飲ませて，よく眠らせてからプールに入れるのだ。そして，針の傷がなおってから実験材料にするのである。

麻酔薬を飲ませていた若い研究員が，「このブラウン・シャークは参ってしまいそうだ」と博士に診察を求めた。ぐったりとのびているサメを注意深くみていた博士は，やがてそれを解剖することを命じた。

解剖のメスが胃を開こうとしたとき，カチン……と異様なかすかな音。若い研究員は経験的に直感したらしく，「あの音がなんだかわかりますか？」とわたしに問いかけたが，もちろん，そんなことがわかるはずはない。開かれた胃の内容物を見て，わたしたちは思わず固唾を飲んだ。胃のなかからは，なんと革靴が片足，バンドが1本，そして懐中電灯が1個でてきたのである。

興味深いサメの研究

海は地球の70パーセントを占めているが，水温が18°C以上の海洋なら，どこでも人食いザメがいる。人食いザメのあごの力は恐ろしく強く，バイトメーターで調べると，1平方センチあたり約3トンもの強い力がかかるという。人間のからだなど，ひとたまりもないはずだ。

この研究所では興味あるいくつかの実験を見たが，その1つにサメの心電図の研究がある。それは，サメのからだに電極を取りつけ，防水処理したコードを引っぱりながら泳がせ，これを心電計につないで心電図を調べるのである。

サメが単純に海中を泳いでいるときと，肉の塊を嗅ぎ分けたときとは，心電図に変化があるのだろうか。もし，肉の塊を見つけたとき，心電図に変化が起これば，サメの鼻はまさに鋭敏な〝泳ぐ鼻〟といえるだろう。しかし，心電図には別段の変化はなかった。これについて博士は，人食いザメが海のなかで人間を捜すアンテナは，おそらく鼻だけではないだろう，と語っていた。

ほかに，人食いザメの襲撃から，人間をいかに防衛するかの実験がある。

まず，サメの目を黒いプラスチックでおおってプールに放す。めくらのサメは，プールの壁に頭をぶっつけながら泳ぐ。今度は，プールの中に黒い色素を流しこむ。目の見えるサメは黒い水を避けて泳ぐが，めくらのサメは黒い水のなかを，ためらいもなく泳ぎつづける。

この簡単な実験は，新しいサメ防衛法を生みだした。それは人食いザメのすむ海に落ちたら，すぐに携帯用の黒い色素をからだの周囲に流して，サメの襲撃から守ろうとするものである。しかし，負傷して傷口から流れでる血のにおいが，サメを呼び寄せることもある。そんなときはシャーク・スクリーン，つまりサメ防衛用の袋の中にはいればよいと博士は教えてくれた。

この袋は，薄くて強いゴムと布で作ってあり，不用なときは小さく折りたたむことができる。不幸にして，人食いザメのすむ海で事故に会ったときは，袋に空気を入れ，その中にはいって救助を待つのだ。このほかに，サメの感覚や行動の生理，サメの繁殖など，ギルバート博士の研究分野は広いし，その業績はすぐれている。

きょうも沖へ向かうボートの上で，博士は語っていた。「平和で，静かな海のために，残った人生の火を燃やしつづけますよ……」と。■

（NTV「すばらしい世界旅行」・東威）

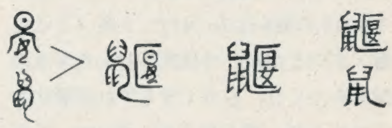
川にすむ哺乳動物には，人なつっこいボート（別名イニヤ＝淡水性イルカ）とベーシ・ボイ（牛魚）がいる。ボートは魚を集めてくれるので，漁の守り神として現地人インディオはとることを好まない。ベーシ・ボイの頭は角のないウシで，からだは魚にそっくりである。南海のジュゴンのように子を抱く姿から，アマゾンでも人魚と呼ばれている。水面に頭を出して，岸べの草を食べる。そのあたりには牛ふんそっくりのかたまりが浮かんでいる。肉がおいしいため乱獲され，保護政策で細々と命をつないでいるありさまだ。

アマゾン川は，季節によって5メートルも水位が違う。川沿いでは，原始林のなかまで水浸しになっていた増水期が終わると，川は大小の浮き島を押し流しながら，どんどんと水位を下げていく。原始林の間には複雑な形の沼地が残されるが，これもやがては干上がり，逃げおくれたたくさんの魚は，熱帯の太陽に干されて干し魚となる。この干し魚の臭気が，相当離れた町にまで流れるため，天然の公害として最近問題になりだした。道もない原始林のなかのこととて，手のつけようもない。腐肉をあさるカラスに似たウルブーにとっては，絶好のえさ場が永久に保証されているようなものだ。■

（長崎大学水産学部学部長）

漢字のふるさと 10

藤堂明保



鼴（もぐら）　「鼠」＋「匽」という字で書き，エンと読む。中国の俗語では「田鼠」「土鼠」「地老鼠」などと呼ぶ。

匽は，安－按－宴などと同系のことばである。ヒステリーの女性を，マアマアと押えて家の中におちつかせるのが「安」，按摩さんがするように，上から下へと指で押さえるのが「按」，また宴会の宴とは，上から下へじっくりと腰をさげてくつろぐことだ。「論語」に「風は，その上に風ふけば必ず偃す」とあるのも，やはり上から下に体を低くおしさげて伏せることである。

モグラをエンと呼ぶのは，体を低く下げて地中に伏せているからだ。4月のポカポカ陽気の日に，庭のすみを掘り返すと，今でもモグラにお目にかかる。いちど飼ってみたが，高く明るい所はいやだとみえて，ハンストのすえ，3日めに昇天した。■

田中光常

動物写真のポイント

14. バックのボケ



愛のふんい気を盛りあげよう

セキセイインコ
6×6カメラ
レンズ 250ミリ
F5.6 1/125
フィルム SSS

仲のよい小鳥を見ているのは，ほんとうにほほえましいものである。1つ1つの動作が，とてもこまやかでかわいらしく，そのうえ鳴き声がほがらかで楽しい。野山にいる小鳥たちはもちろんのこと，家庭に飼われているペットの小鳥たちも，わたしたち人間の世界に幸福をもたらすエンゼルそのものである。

おそらく，このチュッチュッの動作も，親子のえさの口移しから，自然にそなわった習性の1つであろうが，肩に手を——いや足をかけているところなんか，なかなかいかしているではないか。

このふたりの愛の語らいのふんい気を，いやがうえにも盛りあげているものは，いったいなんだろうか。

それは，まずバックのやわらかいボケであり，次いで，2羽相対のバランスを少しばかり破っている，しゃれて曲がった小枝にほかならない。

数ある止まり木のなかから，この曲がったものを選んで写した撮影者の非凡さをほめてやってほしいところだが，実は，小鳥たちにとっては，曲がっていたほうが安定感があって，動作しやすいと思ったからにすぎないようだ。■

ペット相談室



担当
前川博司
（日本動物愛護協会附属動物病院院長）

〈問〉 わたしのイヌは散歩にいくと，ふらふらと倒れます。すぐ元気になるのですが，こわいので散歩もできません。最近夜中に変なせきをします。食欲もあり，太っていますが，フィラリアでしょうか。（松本市・鳥山真澄・18歳・学生）

〈答〉 おそらくフィラリア症だと思います。運動するとすぐ疲れたり，倒れたり，せきをしたりするのは，フィラリア症による1つの症状です。フィラリア症とはフィラリア虫（大糸状虫）という虫が，カの媒介によってイヌその他の肉食獣に感染し，心臓や太い血管に寄生する病気です。ひと夏，カの多い屋外で過ごすと10匹以上の親虫が寄生することもあり，数夏をカに刺されて過ごすと，数十匹もの親虫が寄生するようになります。

多数の大きな虫が心臓や血管に詰まるのですから，血液の流れは当然悪くなり，また数えきれないほどの子虫は血液のなかを動きまわって，いろいろの臓器のなかの細い血管にはいりこみ，害をします。そのため，たいせつな器官が弱り，からだ全体も衰弱していきます。倒れたり，せきをしたり，食欲もむらになり，ついには腹や胸に水がたまったり，貧血，喀血なども起こします。重症だと3,4歳で死んでしまいます。

外見上，なんの異状もないのに，フィラリアにかかっているイヌは数多くいます。わたしどもの経験では，フィラリアにかかりにくいイヌや，抵抗力のあるイヌもいるようです。同じ環境に同じ年月，ともに生活しているイヌでも，多数のフィラリアの寄生を受けて早死にするイヌもあれば，寄生は受けてもその数がきわめて少なく，害も出ないで長生きするイヌもいます。これは体質的なもの，ある種の免疫的なもの，虫の寄生する場所の違いなどからくる差だと思われますが，まだ確かなことはわかりません。

虫が何を食べて生きているかもまだ不明です。肉食獣でも，ネコにはほとんど寄生しないことや，人間には寄生できないという点なども，虫の生理がわからないので，その理由も不明です。現状では，ジステンパーのワクチンのように強い免疫をつくって，自力で病気を防ぐ力をもたせることはできません。予防は，カに刺されないようにする以外にないのです。カを防ぐことのほかは，フィラリアの親虫や子虫を駆除するための治療を受けなければなりません。治療法は種々ありますが，専門医にまかせるのがよいでしょう。3,4歳以上のイヌで症状の進んでいるものは，治療もむずかしく，危険が多いものです。

フィラリアに対しては，はじめての夏を過ごすときから，早期の治療を毎年することがたいせつですが，まず，治療より予防＝イヌをカから守ることが，もっともだいじなことなのです。■

仲間のひろば

生きること，生かすこと

熱帯魚の飼育を始めてもう3年と少しになる。最近，多種を混泳させて鑑賞する楽しみから，孵化の興味をおぼえ，シクラソマ・セベラムの産卵をさせてみた。産卵床として入れたセトモノの上を，2匹がきれいに掃除しはじめて2日後に100余りの卵を生みつけた。2匹（とくに雌）が口とひれとで昼夜をわかたず水の流れをつくり，もう1日もすれば孵化するところで，雄が何を思ったのか，5,6個の卵を残し全部食べてしまった。

憎さのあまり，気の荒い魚の泳いでいるケースの中にほうりこんだ。1時間後，その雄は見るも哀れな姿になっていた。ひれは食いちぎられ，うろこははがされ……。1日がたった。からだはまっ白い綿のようなものでおおわれ，プカプカ水の流れるままに浮いている。何度も水を取り替え，薬液のなかで泳がせると，5日余りで醜い傷跡を残して元気を取りもどし，えさをあさるようになった。

それから約1週間，今では尾ひれのないからだで雌を追尾する格好を見せる。そんなケースの中で，生き残った子魚3匹が，いかにも楽しそうに小さな尾ひれを動かしている。■

（京都市・駒井 守・22歳・公務員）

シマリスとの生活

飼っているシマリスが，子を生んだ。はじめてのことで，どうしたらよいかわからず，本に書かれているようにしていた。ふつうは巣の中をのぞいたりすると，親がおこって子リスを殺してしまうというのだが，うちのは反対で，子リスを口にくわえてわたしたちに見せにくる。

20日もすると，体毛もはえそろい，目があいてとてもかわいくなった。まだ，足腰がしっかりしていないので歩けないが，目をまぶしそうにパチパチしているのが，なんともあどけなくかわいい。

生まれて2か月ころから，部屋に出して遊ばせた。えさをほお袋いっぱいほお張って，チョロチョロチョロと部屋じゅうをとびはねていたかと思うと，いつの間にかふくらんでいたほお袋がぺっちゃんこになっている。えさは，じゅうたんや机の下に，みんな隠してあった。

シマリスは大のいたずら好きである。おかげで被害続出。ぬいぐるみをかじる，くず入れはひっくりかえす，机の上の物は落っことす。でも，そんな行為さえ，わたしの目を楽しませてくれている。

1匹だけが手乗りになった。肩に乗せたまま外へ買物にいくと，みんなが振り返る。恥ずかしいような，自慢したいような，ちょっぴり楽しい気分である。

シマリスを見ていて好きなポーズは，クルミをかじっている姿だ。あと足でちょこんとすわって，ちゃんと手でクルミを持って，小さな口でちびちび食べている。その姿がいちばんかわいい。■

（東京都・清水悦子・16歳・高校生）

裏表紙説明

チンチラ 生後2週間の子ネコで，写真はほぼ実物大である。この品種は，ネコのなかでも上品でおとなしい部類にはいる。毛の色の薄いものはチンチラシルバー，濃いものがシェーデッドシルバーで写真の子ネコは前者である。最近の流行品種で，飼う人も多くなってきている。

成長すると，目は緑色で，アイラインを引いたような黒いふちができ，鼻の中央はピンクで，周囲はやはり黒くふちどられるのが特徴である。子ネコには特別のしま模様があるが，成長するにしたがって白い毛が伸び，模様が薄れてくる。

撮影のときの物おじしたようすには，純真でおとなしい性格がよくあらわれていた。■ （写真と文 菅野喜勝）

原稿募集

☆読者の研究 ☆動物ニュース ☆仲間のひろば ☆ペット相談室 ☆動物写真
□原稿は，400字詰原稿用紙2枚以内
□住所，氏名，年齢，職業，電話番号明記
□採用分には，薄謝または記念品を進呈
□送り先 東京都千代田区有楽町2の3 朝日新聞社「世界動物百科」編集部『私たちの仲間』係



1500～1502年ころ制作　水彩　グワッシュ

兎　　アルブレヒト・デューラー

デューラーは，ちょうど同時代のレオナルド・ダ・ヴィンチのように，きわめて旺盛(おうせい)な好奇心の持主であり，この地上のあらゆるものに探求の眼を向けた。デューラーの残した数多くのデッサンや水彩は，そのような探求の成果であり，少し大げさにいえば，かれは動物，植物を問わず，自然のあらゆる事物に興味を示したともいえる。例えば，宗教画を描く場合でも，「聖母と動物たち」とか，「三匹の兎(うさぎ)のいる聖家族」のように，主要な登場人物のほかに，動物たちを点景として加えたものが少なくない。そのような動物たちには，宗教的な意味が含まれていることもあるが，それにしても，自然を観察するデューラーの鋭い画家の眼がなかったなら，描き出されなかったであろう。

この水彩の兎は，物語や宗教などとのかかわりなしに，兎そのものを正確に描き出したものである。やや斜め上から見下したようなその対象の捉え方は，兎の特徴が最もよく表現されるような姿勢だといってよい。そして，何よりも驚嘆すべきは，1本1本の綿毛やひげなどを，見事に描き出すその腕前である。細い線を描くデューラーの腕は抜群(ばつぐん)のもので，そのためかれは，特別に細い筆を作らせて，それを使っているのだとうわさされたほどであった。ところがある画家が，デューラーにその特別製の細筆を見せてくれと頼んだところ，そばにあった普通の筆を取り上げて，それで何本も霊妙な線を描いて見せたという話が伝わっている。デューラーの技巧は，仲間の画家たちの間でも，不思議がられていたほどだったのである。■

（高階秀爾）

第１号～第64号（概説・哺乳類）のおもな内容

◉ 数字は号数，白ぬき数字は既刊

世界動物百科　通巻14号　昭和46年6月13日発行（毎日曜日発行）　編集・発行人　大田信男　発行所　朝日新聞社　東京　大阪　北九州　名古屋　印刷・凸版印刷　定価220円



チンチラ　　説明 30ページ

雑誌コード 0632